

30333

教科書文庫

3

810

41-1896

000030 2338

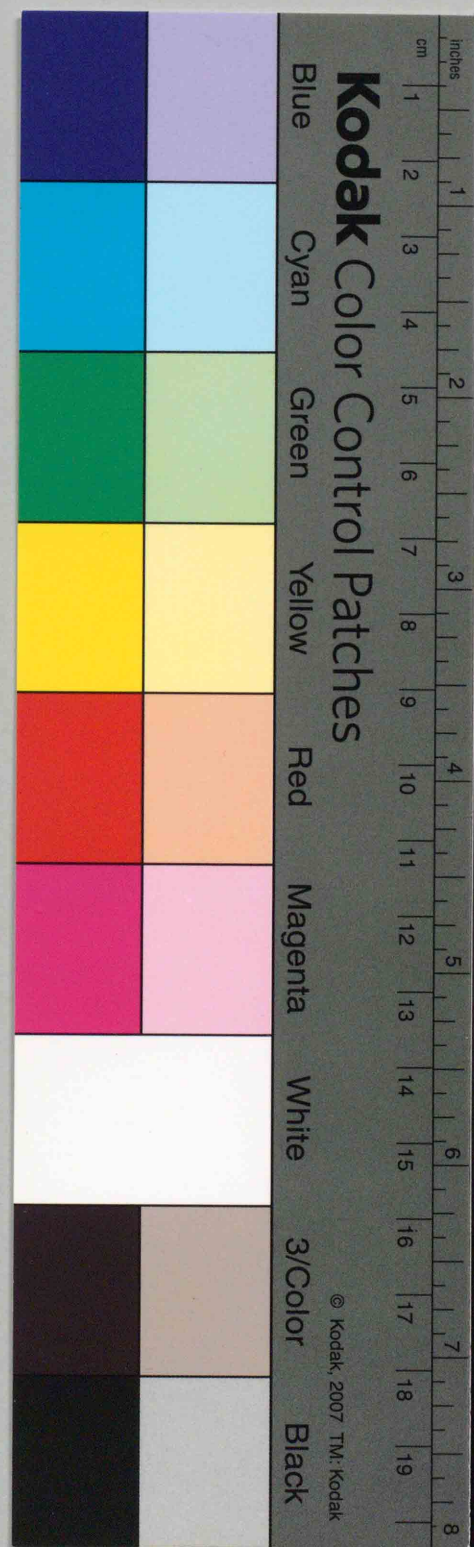
Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches



© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
Fw10  
資料室

新編國文社配本  
三卷上





明治二十九年九月二十八日  
文部省檢定濟

375.7  
F019

文學士藤井乙男編

〔貳之卷上〕

# 新編國文讀本

廣島大學圖書部  
積善館發行



## 新編國文讀本二の卷上

第十目次

- |    |          |      |
|----|----------|------|
| 第一 | 儒者       | 本居宣長 |
| 第二 | 天明の大水一   | 瀧澤馬琴 |
| 第三 | 天明の大水二   | 瀧澤馬琴 |
| 第四 | 天明の暴民一   | 瀧澤馬琴 |
| 第五 | 天明の暴民二   | 瀧澤馬琴 |
| 第六 | 詩文章の問    | 新井白蛾 |
| 第七 | 戦國の士風一   | 室鳩巢  |
| 第八 | 戦國の士風二   | 室鳩巢  |
| 第九 | 細川幽齋文武の譽 | 新井白石 |

*S. Sakai*

*S. Sakai*  
*A. Sakai*

*Matsuyama*  
*no...*

新編國文讀本

二の卷上

積善館發行



第十 結城秀康關東の大

將を承る 新井白石

第十一 勢利の害 中井玚庵

第十二 繪と魂いる、事一 柳澤淇園

第十三 繪と魂いる、事二 柳澤淇園

第十四 塙保己一 伴信友

第十五 杉田壹岐一 室鳩巢

第十六 杉田壹岐二 室鳩巢

第十七 菊の評 石原正明

第十八 訓と字との先後 富士谷御杖

第十九 にとへとの別 富士谷御杖

第二十 文の詞 富士谷御杖

第二十一 ちとづち 石原正明

第二十二 大神宮の茅葺なる事 本居宣長

第二十三 仁徳帝の御製 富士谷御杖

第二十四 坊主といふ稱 齋藤彦麿

第二十五 關東關西坂東山 齋藤彦麿

第二十六 東吾孀 高田與清

第二十七 蒲生君平の傳一 瀧澤馬琴

第二十八 蒲生君平の傳二 瀧澤馬琴

第二十九 求麻川 橋南谿



- 第二十九 求麻川二 橘 南谿
- 第三十 十八樓記 松尾芭蕉
- 第三十一 勇婢小萬一 三熊思孝
- 第三十二 勇婢小萬二 三熊思孝
- 第三十三 女の心得 三熊思孝
- 第三十四 霧島山一 橘 南谿
- 第三十五 霧島山二 橘 南谿
- 第三十六 淺野長政の直諫 新井白石
- 第三十七 澤野原孫太郎 湯淺常山
- 第三十八 滄浪の水 室 鳩巢
- 第三十九 板倉重宗 新井白石

- 第四十 嵐山の櫻 石原正明
- 第四十一 安心立命 橘 南谿
- 第四十二 たのしみ 中井玚菴
- 第四十三 わが國の武威 藤田東湖
- 第四十四 豊臣秀吉 湯淺常山
- 第四十五 水野勝成一 新井白石
- 第四十六 水野勝成二 新井白石
- 第四十七 山内一豊が妻 新井白石
- 第四十八 士の心 松崎白圭
- 第四十九 書札文字の死活 菅 茶山
- 第五十 俳人の書簡 松尾芭蕉



第五十一 短歌四首

作者四名

第五十一 短歌四首  
 第五十二 漢書卷之六  
 第五十三 漢書卷之七  
 第五十四 漢書卷之八  
 第五十五 漢書卷之九  
 第五十六 漢書卷之十  
 第五十七 漢書卷之十一  
 第五十八 漢書卷之十二  
 第五十九 漢書卷之十三  
 第六十 漢書卷之十四

新編國文讀本二の巻上目次 終



新編國文讀本二の巻上

文學士 藤井乙男編纂

第一 儒者

本居宣長

名詞

儒者に、皇國の事を問ふには、知らずといひて耻とせず。から國の事をとふに、知らずといふをば、いとく耻とれもひて、去らぬ事を、去りおに云ひまぎらはず。とい、よろづを唐めりさんとする餘に、其の身をも、漢人めあして、御國を、よその國のごと、もてあさむとほるあるべし。されど、あらず、漢人まはあらず。御國人あるに、儒者とあら

合成名詞

代名詞



むものゝ、おのゝ國の事志らであるべきとさる  
ハ。但、皇國の人と對ひてハ、さあらむも、から人め  
きてよかめれども、漢國人の間ひたらむよも、  
我ハ、そふたの國の事ハよく志れ、をも、我ハ國  
の事ハ志らずとい、さすに得いひたらトをや  
もしさも云ひたらむにも、己ハ國の事をたに、え  
志らぬ儒者の、いりて、人の國の事を志るべ  
きとて手をうちて、いたく笑ひつべし。玉がつま

第二 天明の大水一

瀧澤馬琴

永代橋、大川橋ハ往來をとめられて、柳橋も亦、人  
を渡さず。この他、新大橋の中の間、破損して、和泉

天明  
光格天皇  
將軍家治。

固有名詞

橋は落ちたり。只、恙なきものは、兩國橋一箇所な  
れども、本所、深川の水高ければ、船ならざるもの  
は、行くことえならず。凡、下谷ハ和泉橋筋、外神田  
御成道なぞ、商人の店先を、船よて往還しつること、  
知らざるものは、空言とや思をも。只、之のみよ  
あらずして、小石川御門外、牛込揚場、水道端、せん  
せん橋の邊までも、前もて聞かぬ出水高くて、溺  
死の者少からず。中略只、このわたりの水のみか、  
日本堤を打ち越えて、田町へ水のたれたれば、聖  
天町、山宿、浅草田圃も、一になりて、金龍山の裾を  
繞れり。まいて、千住、松戸の邊、葛西、行徳、千葉のわ

普通名詞



普應寺

安永  
後桃園天皇  
將軍家治

たり、熊谷浦和に至るまで、皆此の水をうけぬハ  
 なし。されど、十七八日の頃よりして、水見舞の良  
 賤奔走しつゝ、辨當、偏提、坐具、調度を思ひくゝに  
 齋して行く者、巷に陸續たり。又、關東御郡代伊奈  
 氏の承りて、馬喰町の明地に、假屋をこつらひ、水  
 厄の者を入れおかせて、日毎に粥を下されけり。  
 略中  
 をもく、此の水の前よりハ聞くことなかりしに、  
 から夥しく出でぬるは、必故あることよなむ。安  
 永の末つ方、町奉行牧野隅州の聞えあげて、新大  
 橋の西の岸を、南へ二町四方あまり、築き出して、

これを中洲町と唱へたり。この處、夏は夜毎に、百  
 まりの茶屋軒を並べて、數多の挑燈をかけわた  
 し、おのゝ、前に棧橋を投げ渡して、船の客の登  
 るに便とす。仙臺河岸より之を見れば、衆星の晃  
 く如く、月なき夜半も、金波流れて、玉兔もこゝに  
 走るかと怪しまる。大橋の南の袂は、四季庵と  
 いひし酒樓あり。或は異形の見せ物、水機器、乞兒  
 鶴市が身振、聲色なんぞいふえせ俳優に至るま  
 で、數へ擧ぐるに遑あらず。略中  
 されば、夜毎にこの  
 河水より劣らばとのみ集ひ泛べる屋形、屋根船の  
 いと多なる、さしも廣かる大川より、楫とりなやむ



ばかりなり。そが中に、花火々々とよぶ船あり、燭酒肴を賣る船あり、菓物を賣る船あり。今宵は誰殿の花火あり、翌の夜は何某が花火ありと罵りつゝ、水陸ともに、人群集して、錐を立つる地もなかりき。略中この他、兩國橋の東の岸を、西へ一町をかり、築き出して、とゞも亦、茶店ありけり。この二箇所の出洲よりて、大川の幅狭くなりぬ。ことをもて、川上より推し下す水の勢、これらの洲崎まさゝへられ、洪水の時に當りて、水の増すとど、前よりハ三尺に餘るものから、其の水四方へ別れ溢れて、下谷、淺草の濕地ハ更なり、神田川の

形容詞

水、逆流して、牛込、小石川の果までも、その蔽やぶれを受くるなりと、水理に詳しく人ハいひけり。兎園小説  
 第三 天明の大水二 瀧澤馬琴  
 予は深川よて生れしかひに、稚かりし時、兩三度人となりても、再度まで、出水ハ屋を浸されて、其の進退に心得たれど、江戸よてかゝる洪水は、前代未聞といひつべし。又、この洪水の夜に、七月十日猿江わたりの民の女房、二歳になりける兒を抱きて、いかまかしけむ、溺れつゝ、半町あまり流されしに、ゆくりなく巨樹おほきの杪うらに、右の手をうちかけて、辛くもすがり留りたり。ざりけれども、兒は



左に抱き揚げたるまゝ、腰より下ハ水を得いで  
 ず。どばかりよして、人の知らねば、助けらるべき  
 命もあらず。益なく膽を冷さむよりは、母子諸共  
 に死なむやとて、樹にすがりたる右の手を、放た  
 むとしたりせむ、手ハ凝り着きたるやうに覺え  
 て、心ともなく絶え放れず。どかくする程に、夜は  
 明けて、助船の漕ぎよせつゝ、船に乗せて引將て  
 ゆきぬる。此の時初めて杪を見しに、いと大きな  
 る。蛇のわが右の手を木の枝諸共いくつともな  
 く巻きてをり。さては、吾手の放れざりしハ、この  
 故なりきと思ふも、忝きこと限もあらず。そが

縁谷間

船に乗る程に、蛇は忽、巻きほくして、ゆくへも知  
 らずなりきとぞ。或はいふ、この女房、舅姑も孝順  
 して、且、年頃、神佛を深く信ずるものなれば、其の  
 應報かと聞えたり。そが村の名も、夫の名も、まさ  
 しく聞きたる事ながら、まるともつけず、年をへ  
 て、いふかひもなく忘れたり。この餘、溺死のあハ  
 れなる當時の風聞、耳に盈ちたり。思ひ出でなば、  
 いくらもあらむを、皆、傳聞のみよして、定かなら  
 ねば、心よとめず。今更思へば、夢よ似たり。かりそ  
 めの事なりとも、その折、まるともかざれば、後よ  
 悔じき事多かる菟園小説



第四 天明の暴民一

瀧澤馬琴

さる程に、五月晦日の事ありけむ。此の夜、戌のころはひに、俠客をも、群立ち起りて、麴町なる米商人の店を、理不盡に破却せり。これハ世にいふうちこそしといふもの、手初と引聞えたる。かくて、その次の日より、或ハ四五十人、或ハ百數人、一隊となりて、江戸中の米屋の店を破却すること、日として間斷なかりけり。初ハ夜中もしくも早朝のみなりしが、後ハ白晝にも、この騒劇あり。その破却する物の響、罵り叫ぶ人の聲、弗撥塵塵として、十町の外に聞えたり。予は、京橋南

傳馬町なる米商人萬作が店の破却せられし迹へ、ゆくりなく通りかゝりて、見てけるに、米穀は皆、俵を斫り断ちて、其の店前に引き散らし、衣類雜具は、箆、筒、長櫃を打ち破りて、路上に投げ棄てたれば、ゆくもの道をさりあへず。その米を拾むとて、貧民の妻、婆々、小女さへ、乞兒と共に打ち交りて、袂よつかみとみ、囊よ入るゝ有様は、耻を知らざるものに似たり。さりとして、制する者もなし。此の頃、小日向水道町にて、豊島屋といふ米商人の、其の店を破却せられし有様を、予が妻の見たりしに、其の事の爲體、とれかれ同トかりきと



いへり。この故に米商人ならざるも、店の様の相似たるの破却せられしも、往々ありけり。鬼國小説

第五、天明の暴民二、瀧澤馬琴、これより、市正より、與力同心を出されて、制せさせたまひしかども、勢當るべくもあらず。只今とあるかどすれば、忽然として、鄰町あり。盗者ぞものそが中に、年十五六の大童の、いつも諸人より先たちて、軒に手をかけ、二階に飛び入り、奮撃すること大方ならず。この人間業ならで、必天狗なるべしとて、牛若小僧と唱へつゝ、人皆戦き恐れしが、後其の素生を聞しに、大工とらそ

名詞の複  
數

といふものよて、渠十二三の比よりして、身體軽く力あり、常に好みて、梁を渡る者なりとぞ。そとめ兩三日の程、甲州市尹も、馬を騎り出して、制せんとせられしかど、彼等いかゞ角ひけむ、搦め捕られし者ありとも聞えず。其の幾群なる盗者、何處の町の誰が店子とも、定かに知れる者あらず。この故に、うちこそこの奴原あらば、速に搦め捕るべし。若手にあまらば、撃ち殺し、斫り殺すとも、けしうはあらずと、いと嚴に町觸ありけり。之より、町々なる家主等、おのゝ竹槍を用意して、夜ハ暮六より、路次を閉ぢ、店番といふものを輪



番せしめ、店中を巡らすものから、もし其の店の米屋が家を、件の者ども群立ちきて、破却することある時ハ、店番はあわてまどひ、拍子木たも鳴しえず、家主は竹槍を引き提げながら、路次の戸内にふるへ居て、阿容々々として、こまさせけり。此の事、江戸のみならず、京、大坂も亦かくの如し。凡、米屋といふ米屋の、米もてるも、持たざるも、破却しあひしハ、闕遺なごと、六月の末に聞えけり。こハ未曾有の奇事といえまし。かくて、米屋は名残なく破却せられて、其の事ハ、いつとなく、凡、一旬餘しして、掻き消す如く鎮まりぬ。鬼園小説

第六 詩文章の問

新井白蛾

或人曰く、詩を作り、文を屬する主意は、いかゞ心得、何を目當しして、學び習ふべき。答ふ、眞景を望み、眞情を寫す事、專要なり。徒に、浮きたる詞を飾り並べて、上手に虚言をつく事なりと、覺えたる類ハ、僻事なりと思ふべし。さて、雜なる事ながら、近年、何とやらむいへる淨瑠璃の文、常し目慣れし山なれを、手に取るやうに思われてと書ける、誠に近世の名文と思える、なり。二條河原より叡山を眺むれば、實も二三町をかりも行きなば、山なるべしと見ゆ。況、此の淨瑠璃の趣よて、



王維が詩  
獨在異鄉  
爲異客  
每逢佳節  
思親遙  
兄弟登  
處、偏挿  
黃、少一  
人。

其の人即、少女なり。少女の心よては、尤、さこそ有るべきなれ。其の實景を盡し、又、其の少女を實の人として、實情を寫し得たり。自、餘情あり。詩歌よても、文章よても、かくの如くなれば、名詩、名歌、名文なり。予常にいふ、詩を平淡温厚よして、餘情あるを學ぶべし。たとへば、唐詩選七絶の中に、富麗凄婉、幽雅、飄逸、種々の風體絶妙なりといへども、王維が、九月九日憶山中兄弟の詩を第一とすべし。一唱三歎なるものなり。文は秦漢以來、たゞ孔明の出師表を第一に學ぶべし。學びて得ずといへども、正路を失せず。さて、文を學ばゞ、譯文を常

秀康卿  
結城秀康。

よ習ひ、孟子を則とすべし。初學は、始より何の體何の格なぞいふ事を論せず、今日見聞する所の事をも、何よても筆とりて、其の趣を自由に書きつらね、漢人よ見せても、其の心に通ずるやうに書き習ふ事を第一とすべし。筆よく常語をいふやうに至れば、何の體も自ら書き得べし。聖學自在

第七 戰國の士風 一 室 鳩巢

秀康卿、越前に封せられ給ひし後、阿閉掃部とて、武功のはまれありし者を、厚祿にて召し抱へられけり。また、狛伊勢とて、これも、國にて、世祿の歴々なりしが、嫡子に、鎧の着初させけるに、かの掃



部を招待しつゝ、子に鎧きする事をたのみけり。さて、饗膳すみ、祝の盃に及びし時、伊勢、今日は、愚息が、鎧の着初にて候ふまゝ、御身の御武功の事、御物がとり候ひて、彼に御聞かせ候へといひしに、掃部、いや某が身の上に、御話し申すべき程の武功は、覺ゆ申さず候ふ。されど、御望に黙し難く候ふまゝ、某、一生の内に、武者振しるがの見事なる士を一人、見申して候ふ。其の事を、話し申すべし。江州志津が嶽の戦に、くれ方に、某、一騎、余吾の湖のわたりを、引き候ひしに、敵とおぼしくて、うしろより詞を、かけし故、馬を引き返し候へば、其の人申

し候ふは、今朝よりかせぎ候へども、よき敵にあひ申さず候ふ。御人體を見うけ、幸とこそ存し候へ。御不祥ながら、御相手になり申すべしとて、進みより候ふ故、それこそ、なたる望む所にて候へ。とて、たがひに、馬を乗り放ち、既に、鎧をあはせむとせけるに、其の人、まばし、御待ち候へ。今朝より、雑兵を、多く、突きくつし候ふ故、鎧よとれて候ふまゝ、鎧を洗ひ候ひて、御相手になり候はむとて、餘吾の湖に、鎧うちひたし、二三遍洗ひつゝ、さらばとて、突き合ひしが、久しく、勝負なかりし程に、日も暮れはて、物のあやめも見ゆずなりぬ。



駿臺雜話

第八 戦國の士風二 室鳩巢

其の時あなたより又詞をかけもはや鎗先も見  
せず候ふ御殘多くは候へどもこれまでにて候  
ふ御いと申し候ふべし御名こそ承りたく候  
へ某は青木新兵衛と申す者にて候ふとて某が  
名をも承り候ひてこの後又陣頭にて出で合ひ  
候はゞたがひに人手にはかゝり申すまゝ候  
ふもし又身方にて候はゞわりなく入魂致し候  
ふべし。さらばとて立ち分れしがこれ程見事な  
る武士はつひに見侍らずいかゞなりはて候ふ

にかど語りけるに其の頃伊勢がもとに心安く  
出入りする青木方齋といふ浪士あり其の日も  
来て勝手に居たりしがこの物語をきゝて勝手に  
よりにちりいで掃部に向ひてさても唯今の御  
物語承り今更昔を思ひ涙を落してこそ候へ其  
の時の御相手になり候ふ青木新兵衛ははづか  
しなからわれらにて候ふかく申すばかりにて  
は浮きたる事におぼすべく候はむとて其の時  
雙方の鎧のおそし馬の毛色を一々いひけるが  
一も違はざりければ掃部驚きつゝ扱は久しく  
てあひ候ひて本望に候ふとて手前にありし盃



を方齋にさし、これを悉るしにて、腰の脇ざしを抜きてひきけり。それより、方齋が名國に高くなりし程に、秀康卿の耳へも達せしかば、掃部と同一祿にて、召し出たされけりぞ。駿臺雜話

第九 細川幽齋文武の譽 新井白石

丹後には、藤孝入道に、年老いたる、いとけなき者をもばかり、残り居て、はかどくしく、軍すべき者多からず。されども、入道、さる古兵にて、少しも騒ぐ氣色なく、宮津の城をすて、田邊の城にたてともり、かたき遅しと待ち居たり。そもく、此の入道と申すは、弓矢うち物とりて、堪能なるのみ

にあらず。さらぬ小藝またに、達せずといふ事なく、天下に雙なき多才多藝の人なりけり。中よも敷島の道を、深く好きて、古今和歌集の秘訣、ことごとく、此の人に傳はれり。されど、此の度わが身討死したらん後、此の道長く絶はなむことを悲み、城に籠れる初、相傳の書をも取り集めて、大内へ奉るとて、

古も今もかはらぬ世の中に  
心種のこす言の葉

といふ、一首の歌をへて、参らせける。かくて、丹波、但馬の軍勢雲霞の如く押し寄せ、十重はたへ



にとり巻き、水火になれど攻めければ、入道ちつともひるまず、ふせぎ戦ふ。かくて、此の城、なかなか一時に、攻め落さるべうも見ゆず。烏丸右大辨、勅使として、大坂に行きむかひ、輝元、三成等に、勅諭を傳へらる。それ、和歌は我國の風として、天地開けは、トまりしより、このかた、百王の今に至る迄、其の道長く傳はれり。然るに、今、古の事をも、歌の心をも、知れる人、たちまちに失せなむこと、とも、朝家の歎なり。いかにもして、彼の二位法印が、恙なからむやうをはかるべしと、宣べられたり。輝元を始として、奉行等、謹みて承り、いそぎ、早

馬をたて、寄手の軍をとむ。もとより、入道は今を最期と思ひ切りて、戦ひし程に、寄手、たやすく引いてかへらむこと、叶ふべからず。此の由、生た都に聞ゆしかば、三條西大納言、綸命をふくみて、丹後國に下向ありて、速に勅に應じ、其の城を去るべしとありければ、入道、畏りて、普天の下、率土の濱、王土王臣にあらずと、いふことなしと承る。ましてや、この微賤の身、かく、生のあたり、寵渥の辱きをかうぶるをや。さりながら、入道が年若き時ならむには、弓矢とる身の習なり。あへて、死を白刃の際に決して、深く恩を黄泉の下に感ず



ることもあるべし。今はよはひ既に傾きぬ。たとひ此の戦に死ぬる事なからむにも、餘命また幾ばくぞや。されば惜しがるまゝ身なる故に、私の名譽をむさぼりて、いかでか王命にはそむき参らすべきと答へ奉りて、やがて城を去りて、高野山に去り越さける。

第十 結城秀康、關東の大將を承る。新井白石

徳川殿、奥の景勝中納言御誅伐の時に、上方の早馬來りて、大坂にも事起りぬと申す。身方の大名小名、小山の御陣に集りて、軍評定す。まづ此の所

疑問代名詞

代名詞の對稱

より引き返して、上方に向はせ給ふべきに、議定す。徳川殿、本多佐渡守正信を召され、家康西に向はむ時、景勝やがてあとを追うて攻め登るか。さらずは、又關東にや亂れいらむ。誰か此の所に残り留りて、軍をばすべきと仰せらる。正信、誰と申す。さらば召せとて、召す。守殿、御参あるに、正信むかへ参らせて、いかに殿、天下の安危は、今日に決し候ひぬ。能く心して物申させ給へとて、御あどに従ひて、御前に参る。徳川殿、東西の軍の事、御物語あり。其の後、おこと。我がために、此の所にと



自稱

ままりて、關東を鎮め給へ。われはまづ、上方に向  
 ひて戦はむと思ふはいかにと仰せければ、守殿  
 御氣色あしく成りて、秀康いかで御あとに残り  
 候ふべき。たゞ、いづく迄も御さきをこそ、駈け候  
 ふべけれと宣へば、上方の軍勢は、皆國々の集り  
 勢、何十萬騎ありとて、何程の事があるべき。そも  
 そも、上杉家は、累代坂東の大將にて、中にも、故輝  
 虎入道が時に至り、弓矢取りて、天下に、肩を雙ぶ  
 る者すくなかりき。されば、其の子にして、景勝、ま  
 た幼弱の昔より、軍の中に成長し、年、既にふけぬ。  
 當時、かれに向ひて、たやすく軍せむもの、多から

他稱

東

感歎詞

ず。あつばれ、おことがためには、能きかたき、海道  
 に向ひ、うちとみの軍せむよりは、おこと一人と  
 ことに止りて、軍したらむには、且は、弓矢取りての  
 面目、何事の孝行か、これに過ぐべきと、仰せけれ  
 ば、やゝありて、守殿、軍は、かならず、勢の多少によ  
 らずと承る。上方の大將にも、名を得たる輩、すく  
 なからず。勢の程も、又、さこそ、多からめ。秀康、いま  
 た軍には、慣はぬをも、景勝一人が勢と、戦はむに、  
 何程の事あるべき。あはれ、大將をたに御ゆるこ  
 あらむには、此の所に、留り候ふべきと、宣ひし  
 かば、正信、聞きもあへず、いこくも、仰せ候ふもの

感歎詞



感歎詞

かな。關東を鎮め給はむに、大將を參らせ給はむ  
 こと、仰にや及ぶと申しければ、徳川殿よにうれ  
 しげにて、頻に御涙を流され、みづから御鎧一領  
 とり出して、そもく、此の鎧は家康が若かりし  
 より身につけて、終に、一度の不覺をおぼせず。父  
 が佳例に准へて、今度、奥方の大將として、よき軍  
 し、天下に名を挙げ給ふべしとて、參らせらる。守  
 殿も、御心地よげに、御暇申させ給ひ、下野、國宇都  
 宮に陣取りて、關東を鎮め給ひしに、上方の軍敗  
 れてのち、景勝も降を乞ひければ、伏見に參り給  
 ひけり。潘翰譜

動詞

第十一 勢利の害

中井登庵

讚岐國にやありけも、國の守、佛をたふとみ、大き  
 なる寺をつくれり。つひえ多ありければ、民いた  
 うつゝあれたり。あるとき、いみじき僧の老いたる  
 を、守めしづれて、寺にのほり、そこら見あるきて、  
 此の功德いかよとのたまふ。かの僧、眉をひそめ、  
 とは、國民の涙もてあらひ、あふらもて、琢けるな  
 り。なよの功德かあらむと。たふ。大あるた興さめ  
 て、そべる男らにらみあひて、いらへるものな  
 し。す。し。き。胸よりいふなれば、かゝる事、たびた  
 ひなれを、守いたく心よもあけず、たふとめりと

形容詞  
しく、し、し  
きの活用。



なむ。今の世すて人、大やうあるはまれなり。ものまなびして、家をも、國をもとのへて見むとて、出でつかふるあきりも、家にありし時は、こと人の君もいさめず、財をわたくしせしなぞ聞けば、いたくそしり罪すれど、出で、位を得れば、さしめのこととは、皆たがふ。そもく、何ものゝこれを去らしむる。勢、これをおさへて、利、これを導けむなり。とはずかたり

第十二 繪は魂いる、事一

柳澤淇園

ある人、予がもとに來りて、繪に魂をいると申を

元信  
符野元信、永  
仙又玉川と

こと、いかやうなることをして、書き侍れば、魂は入り候ふことぞと問ふ。予こたへていまく、すべて、繪はかぎらず、何事よても、實心をこめてたゞ致さば、魂の入らずといふ物あるべからず。他のことはいざ知らず、繪に魂のいりたりと思ふは、諸國にて、種々名畫も多かる中に、我が見しは、泉州堺、一國寺といふ精舎あり。この寺は、千利休しばらく居られし時、物好きを盡して、庭園座敷、五間はぞあり。一間は、檜の樹一本をゑがけり。一間には、臥したる鶴、二十五羽ばありをゑがきてあり。いづれも、彩色ありて、古法眼元信の



も號す。足利  
義政、義隆、義  
植、義晴に歴  
事し、永祿二  
年、八十四才  
にて歿せり。  
土佐光信、僧  
雪舟と合せ  
て、世に畫家  
の三傑と稱  
す。  
接續詞

筆といひ傳へたり。  
そのかみ、この畫をかける畫師、この寺に寓居す  
ること、三年ばかりの中に、何一、畫きたることな  
く、碁を好みて、只、そのみ日毎の樂として、ある  
は、こゝか、こゝ遊びあるくには、やく、三とせを  
經たり。一たびたゞ、筆をとりし事もなきはいか  
よも、心得ざる者あなど思ひて、あるとき、住持の  
申されけるは、そのもと、畫をもて、一家をなせり  
といひながら、筆を取りたる事もなく、圍碁の  
み、年月をすくさるゝは如何。われ衣食の費を  
いとふにはあらねど、何處へなりとも遊び給へ。

接續詞

愚老も所用ありて、京へのほり、ことよよりては、  
一年も在京せむも、測りがたしといふに、彼の畫  
師きゝて、それこそ、いと名殘をしき事に候へ。さ  
あらば、年來の恩謝に、少しの畫を殘しなむらま  
べしとて、心がまへのみよて、又、四五日はをふる  
はせよ、住持は何をゑがくと、見たくて待てども、  
絶えて筆をとらず。雲萍雜誌

第十三 繪と魂いるゝ事二

柳澤淇園

副詞

ある夜、小坊主の住持が居間に、夜ふけて來りひ  
そゝに申すやう、あることに行き給ひて、そゝのろ



きて、畫師のありさまを見給へどさ、やきけるに、やがて、小坊主に誘はれて、畫師が居間をうかゞふに、明障子の腰板に身をよせて、さまさまの姿をかへつゝ、寢起する有様を見るより、小坊主をひきよせ、こよかし、のろくべあらず、はやく臥せよとて、その身も寢間に入りたり。あくれば、畫師またきに起きいで、一間なる障子ゝゑがくを見れば、みな臥したる鶴なり。畫勢不凡として、丹精の妙いふべからず。さあるよ、又の夜は、いゝにとうあゝふに、前の如く、夜もすがら寢ずして、あけなば、かくや畫かむとやせむ、かくやあらまじ

なぞ、獨つふやきつゝ、臥しぬれば、住持もしらぬ顔して、すくしゝが、十日あまりにして、その鶴、およそ、二十四五羽をゑがけり。またも夜ふけて、覗き見るに、こたびは肘をはり、足をのべ、手を口にあてつゝ、鶴の臥したるさまをなせり。夜あけて、かの畫師がもとに住持來りて、けふ、ゑがき給むむ鶴の姿は、あやうにやあらむとよ。べ、覗き見たる姿のさまして見せければ、打ち驚き、禪師には、わが畫かむと思ひかまへし心をはやくも悟り給ふは、いかにいと問ふに、いやとよ、昨夜そのもとのやうすを、ぞ、どうかゞひて知りたりといへ



新編文藝大系 一〇九

十九 春 幸 會 廣 川

副詞

ば、畫師、それよりして、二枚はゑが、すして、杉戸の畫に檜の木、一樹をゑがきていで立ちぬとぞ。この檜の木をゑがきし後、東國へ下向の折るら、東海道箱根の山中にて、檜の木の枝の心にあるなひたるがありければ、東國へは下らずして、ふたたび、泉州一國寺へたち越えしかば、住持見て、大に驚き、東國へ行き給ふと聞きしに、又もや、來られしはいかなる事よるといふに、さきよ、畫きし檜の木の枝、一枝足らぬところあり。箱根よて、その意を得たれば、わざと立ちもどりたりとて、一枝をかき添へ、いとまごひしていで去りぬと

ろ。畫に魂を入るといへるは、かゝるたぐひと思ひぬといへば、ある人も感とて歸りぬ。雲萍雜誌

第十四 塙保己一 伴 信友

信友、通稱は州五郎、若狭の人、考證の學を以て、その名世に著る。本居宜長歿後の門人なり。弘化三年十月年七十四にて京師に歿せり。中外経緯傳、假名本末等の著書あり。

警者職、檢校塙保己一は、幼き頃より、言よして、白黒の色のけぢめたし、心よ知らぬ身として、怪しく、書を好みて、人よ讀ませ聞きては、やがて、それようるべて、忘るゝことなく、ことらの古書をひろく集め、世よあくれたりける珍書をもをさへに、あまたもとめ出たし、校訂して、とれるれのめ

弘化  
仁孝天皇、  
將軍家慶。  
形容詞  
く、しき活用。

新編文藝大系 一〇九

二十 貴 尊 官 殿 版



でたきをつぎく、摺本となし、又百枚いたらぬばかりの書をも、千二百七十餘部とり集めて、群書類従と號けたるを、六百三十卷あまり、摺本になして、世にあらはし、猶それ遺せるを、又前にも勝るばかり、續編とすべくものして、またがまへの目録は、はやく摺本にして、世に出たせり。また、古本をもをまへ考へて、書きと、のへたる書をも、何くれと見えきとえて、とりくめでたき中、公にきこえあげて、纂めたりといふ史料を、殊、大きなる功、なむありける。さて、その史料の、宇多帝の御世をは、つめて、近き御

文政  
仁孝天皇  
將軍家齊。

寛永  
後水尾天皇  
將軍家光。

世にも及ぶべく、またがまへして、おのがなからむ後の事まで、よく認めおき、過ぎよし、文政五年の七月九日、八十あまりして、身まかりぬとぞ。あはれ、そのは、つめを聞けば、常のよろほひ盲よてありつるが、書をなびの道に、志ふるく、力を出たせるいさをに、よりて、その徒のよき階、す、み、遂、その長とある職、檢校と云ふに、さへなされて、世をつくせるは、古より、たぐひなき人よと、そありけれ。比古婆衣

第十五 杉田壹岐一 室鳩巢

寛永の頃、越前故、伊豫守殿の家老、杉田壹岐と



助動詞

いふ者あり。もとは足輕なりしが、其の身の材を  
 るて、微賤より登用せられ、厚祿をうけ、國老に列  
 じけり。伊豫守殿、參勤にて、一年在江戸の内、費用  
 過分なりしを、常々前年より支度して、用度足る  
 様に去けるは、偏々壹岐が功なりきとあやそむ  
 さる事にて、常々犯顔直言して、君の過を匡救せ  
 る事を忘れず。或る時、伊豫守殿在國にて鷹狩し、  
 晡時に及びて歸城あり。家老共、いづれも出で迎  
 へしに、伊豫守殿殊の外氣色よろしく、家老をも  
 一對して、今日若もの共の働いつに勝れて見え  
 ぬ。あれにては、萬一の事ありて、出陣すとも、上の

御用に立つべしと覺ゆるが、其の方をも、  
 承りて、いづれも喜び候へと有りしかば、家老を  
 も、いづれも御家のため、何よりめでたき御事に  
 て候ふといひし、壹岐一人、末座にありけるが、  
 黙々として居たりしを、何といふと、暫く見合  
 せられしが、こらへ兼ねられ、壹岐は、何と思ふと  
 ありしに、其の時、壹岐、只今の御意承り候ふに、憚  
 ながら、歎かはしき御事に存候ふ。當時、士ども  
 御鷹狩の御供、いいて候ふとては、さきにて、御手  
 討となり候はむも、計り難しとて、妻子と暇乞し  
 て、立ち別れ候ふと承り候ふ。かやうに上を疎み



候ひて、思ひつき奉らず候ひては、萬一の時、御用に立つべしとは存せず候ふ。それを御存下なく、頼もしくおぼし召さるとの御意こそ、愚なる御事にて候へど、云ひしかば、伊豫守殿、大きき氣色を損下ければ、何某とかや云ひし者、伊豫守殿の刀持ちて、側より居たりしが、壹岐より座を立ち候へと云ひしを、壹岐聞きて、其の人をはたとにらみ、孰もは、御鷹野の御供して、鹿猿を逐ひて、かけ廻るを御奉公とす。此の壹岐が奉公は、さよてはなし。いらざる事申し候ふなとて、其のまゝ脇差を抜きて、後へなげきて、伊豫守殿の側へ進み寄り、

只、御手討に遊ばされ候へ。空しくながらへ候ひて、御運の衰へさせ給ふを見候はむよりは、只今、御手に懸り候ハ、責めて、御恩を報下奉る志の志ること存下候はむといひて、頸をのべて平伏しけるを見給ひて、何ともいはず、奥へ入られけり。駿臺雜話

第十六 杉田壹岐二 室 鳩巢

其の跡よて、外の家老をも、壹岐より向ひて、御爲を思ひて申されしは、尤よて候へども、折もあるべき事にて候ふ。今日、御鷹野より、御機嫌にて、御歸ありしに、御氣先を折られ候ふことは、遠慮もあ



るべき事とこそといひしを、壹岐君へ諫を申し  
 上げ候ふも、御機嫌を考へ候ひては、よき折とて  
 はなき物にて候ふ。今日は、よき序とこそ存下候  
 へ。其の上、某事は、御取立の者にて候へば、各とは  
 わけの違ひたる者にて候ふ。御手討に逢ひ候ひ  
 ても、其の分の事にて候ふと云ひければ、諸家老  
 各、感下合ひけり。  
 さて、家へ歸り、切腹の用意して、君命の下るを待  
 ちけるが、日比、糟糠の妻のありけるも向ひて、其  
 の許し言ひ置く事、只一侍り。御身は、女の身なれ  
 ば、直し御恩を受けたるにてはなけれとも、己、御

心 心

高恩を荷ふ故に、足輕の妻といはれし身が、今、歴  
 歷の妻とて、大勢の所從し圍繞せらるゝは、限な  
 き御恩もあらずや。然れば、我が生害仰せ付けら  
 れむ跡にても、只朝夕、今までの御恩の有難かり  
 し事を忘れずして、假しも上を怨み奉る心ある  
 べからず。若、女心にて、我の身のものうきまつけ  
 て、上を怨み奉る様なる事を、言葉の末も露お  
 きなば、黄泉の下迄も深く怨と思ふべしといひ  
 けり。  
 さて、今やと待ちけるも、夜ふくる程も、人來て門  
 を叩きしむ、召ある儘、登城すべしとなり。さてと



そと思ひて、登城しけるよ、をぐゝ寢所へめしい  
れ、其の方お晝いひし事、心よ懸りて寢られぬ間、  
夜陰なれども、呼びつるなり。我が誤りたる事は、  
兎角言ふよ及ばず。其の方お心ざしを、深く感ト  
思ひて、満足すとの事よて、直に、腰の物を賜はり  
しお、壹岐も思ひよらぬ事とて、覺えず、落涙に咽  
びつゝ、拜賜して罷り出でけりとぞ。此の事は、翁  
加賀よありし時、越前の人ありて語りしお、今お  
もへば、此の杉田壹岐なとこそ、東照宮の仰せら  
れし、世よ有りたき家老といふべけれ。殊に、一  
番槍よりも、難き事よあらむかし。 駿臺雜話

第十七 菊の評 石原正明

置きまど  
はせる  
古今集の歌  
に、心あてに  
折らばやをら  
む初霜のおき  
まどはせる白  
菊の花。

黄菊白菊  
云く  
服部風雪が句  
なり、風雪は  
蕉門の高足。

から國よても、菊を黄ふるをめづめり。詩をよ  
え、黄菊、黄花なとぞ、きこゆる。皇國よも、置きまど  
はせると、霜によそへしより、はとめそ、白きをむ  
ねやいひならはしたり。まよや、手をつくした  
るくさくさの色よりも、白菊、黄菊の、いとく大き  
ならず、又、小くえあらぬを、とさどつくろひよを  
えせて、咲かせたる、此の園乃中なと、そこらの松  
影よ句ひみちとるところ、をかしけれ。そがきくせ  
と、黄菊のことありといふ、さる。事よや、何おしと  
かやきこほし、連歌師の句に、黄菊白ぎくその外







古今集は延喜五年紀貫之等が輯めたるものにして勅撰和歌集の始なり  
脚結 富士谷氏が語學上の術語にては、こゝにはどいふか如し。  
萬葉集

古今集も、僧正遍昭がもと、奈良へまゐりける時云々とかける、この文字、へ文字、處よりてハ、いづきををりど、置き煩ハる、脚結あり。此の端作との二ををきまへむ、究竟あり。もと、にハ處をすゑて指す心あり。へ文字ハ方角をたて、指す心あり。さきば、僧正遍昭がもと、にハ、其の遍昭が在處を指したるあり。奈良へとい遍昭が在處の方角を指せるあり。こゝを、遍昭が在處に至らむの志よて、奈良の方へ行くとの心あり。能く思ひとくべし。に文字ハ其の例ひくよ及ばず。へハ萬葉集よ、いざ子をも、やまとへともやく、古今集よ

北へゆく鷹がふくあるをよめるをいふあり。ふた人のハ、にハ雅言、へハ俗言のやうよ思ひためり。げよ、今ハよといふべき處をも、へとのといふあり。あへりて、あまあよハ、へとも、よとも、常いふハ、古言の傳はせるあり。へ文字、よ文字の用、かむありの別あるものよきは、さる事よ惑ハずして、用ひとくべし。北邊隨筆

第二十 文の詞

富士谷御杖

文をかくに、心うべき事あり。まかる、たうべ、はべるなどの詞あり。これら、撰集の詞書に、つねか、れたるは、撰集は、もと、奏覽の爲にかける詞なれ



むなり。されむ物語文なぞも、人よものいひ、答  
ふる時、またも消息なぞも、こぞも、さへる、まかるな  
ぞもかゝれたれ。よく思ひわくべき事なり。いふ  
かひなききまこと、そあらめ、世にその名えられた  
る人すら、この誤は見ゆめり。北邊隨筆

第二十一 ちとつずる 石原正明

九國、四國乃人の物いひにも、ちとしと、つとすと  
此濁音、れれづから、わあるといふ。常、其の國々の  
人に、何ひて、物いふとき、なむら、心をはるで過  
しつるを、さいつ比、思ひれとし、松平肥前、守殿  
乃家臣、峰六郎矩當といふ人、れもとに、行きとり。

物語を、る不せよ、心をつけさきけむ、れのづあら、  
分別あり。ちつれ濁も、舌短き人乃物いふととく、  
れもく、いひあときが如し。さるも、舌のさきを、上  
齧に、さしあて、ちといひ、づといひ、なむら、はま  
つ故、れえく、いひあ、たきが如くなり。ト、すも、いひ  
さま、やゝ、かろく、やすげ也。いひは、トむるは、せ、清  
めるが如くに、末よとる。れもふよ、舌を下齒に  
さしあて、さまに、いふ故、舌乃、齒よ、いまた、さし何  
とらぬ、ほせも、清音の如くに、さ、あて、はつ、き、濁  
るに、やあらむ。分明し、聞きわけ、けふも、かうか  
うの事にて、それ聞き分けむとて、來つせ、いひて、



さてかへりぬ。其の後え、其の國々乃人にて逢ひて、  
物がとりまゐるに、すべし、心もはるす。年々隨筆

第三十二 大神宮の茅葺ふる事

本居宣長

伊勢の大御神乃宮殿の茅葺ふるを、後世に質素  
を示す戒ありと、ちりき世の神道者といふもの  
なぞのいふあるも、例乃、漢意よへつらひとる、う  
るさきひがことなり。質素をたふとむべきも、事  
にこそよれ。すべて、神の御事、質素をよきに  
すること、さらばなし。御殿のみならず、獻る物も  
とえ、何れ、力のとへとらむるぎり、うるはしく、い

らめしく、めでとくまるところ、神を敬ひ奉るよと  
あれ。みあらう、又、獻物もを質素にするは、禮  
く、心ざし浅きまじきなり。そえ、伊勢乃大宮  
の御殿の茅ふきなるも、上つ代乃よそひを重  
し守り、變へとまをざるもの也。然して、茅葺  
がらに、その莊麗しきこと、乃、世またくひなきハ、  
皇御孫命の大御神を厚くたふと敬ひ奉り給  
ふが故なり。ざるを、御みづからの宮殿を、麗  
く物し給ひて、大御神の宮殿を、質素よこと  
まふべきよしあらめや。すべし、ちりき世に、神  
道者のいふまの、皆、からと、ろよして、古の意







形容詞

へるなり。まゝ、同二年三月六日、大衆峰起によりて、其所より山伏乃姿となり、大峰に入らむとせむるに、伴は坊主の僧、義經を送りとするよしあり。これ、住持とつゝあら送里とするなり。衆徒も送りし免とるにあらず。然るを當世も法師はさしにえいせず、醫師、藥道、俳人、遊人、隱居も至るまで、剃髮は人も悉、坊主をいへり。甚しきは、菰かぶりとする無宿をえ、乞食坊主、宿なし坊主をいへり。一坊乃主より、宿なしの名をか。かたびさし

第二十五 關東、關西、坂東、山東、吾嬬

高田與清

續日本紀  
文武天皇より、桓武天皇延暦十年に至るまでの國史なり。

東の山 與清通稱庄次郎後六郎左衛門と改め、更に將曹といへり。號を松酒舎と呼び、該博を以て名あり。弘化四年歿せり。年六十。五著す所、松屋叢書、松屋叢話等あり。

關東、關西とは、足柄、箱根の關をさかひさ、よぶ名にちろらず。續日本紀に、聖武天皇伊勢國へいでまさむとて、朕、しばらく關東へゆるむと宣ひしこと見ゆ。まゝ、東鑑も、賴家將軍、病あつかまじし時、關東二十八國を一幡君に、關西三十八國を千幡君に、ゆづらむとせられしよしあり。辨慶法師が文といふえのに、關西三十三箇國と書きとるは、畿内國をはふけるにや。凡、關西とも、須摩、關より彼方、關中とは畿内をいへるとおぼし。三關は





國よ望東を、とふ、關東とはいへる也。三關を伊勢の鈴鹿、美濃の不破、越前の愛發ふるよし、續日本紀、今、義解、たふ、下き集解、見ゆ。坂東とは、足柄の御坂よりひむろし、此國をいふ。東海道の坂よ望東といへるよし、此稱よて、續日本紀に、坂東八國といひ、今、此世に、關東八州とよふ所、これあり。山東とは、碓氷、此山の東をいふ。東山道の山より東ふれむなるべし。日本紀に、山東を見ゆ。此は、坂東、此國をてえ、たふ、あへていひたきを、後に、上野、下野、出羽、陸奥にかぎまる名なり。吾孀を坂東、山東に、とれる稱ふれ、出羽、陸奥といへるとめ

しふし、あづまぢ、道のまゝなる、常陸とてよえ  
るは、このゆゑにこそ。棟梁集

第二十六 蒲生君平の傳一

瀧澤馬琴

人の心は、あくれ沼の、定るに、目よは見えぬもの  
から、そのよきも、終にはあらはれ、そのわろきも  
終よはあらはる。されば、そのよき人といふとも、  
祿もなく、位もあらで、名を後の世に遺せるもの  
も、只、その人の徳と、學との力によらぬはなし。こ  
とよ、その人あり、吾が友、脩靜菴のあると、これな  
り。



脩靜庵は元、福田氏、後にその先祖の氏郷朝臣の族より出でたりと聞きて、氏を蒲生と改めけり。名を秀實、一名は夷吾、字を君平、脩靜はその號にて、野州宇都宮の人なり。中略

かねて志を編述せむと志あり。古の山陵、多く荒廢して、その跡定らならずと、聞く事久しきをもちて、まづ山陵志より規めむと、獨行して京へ赴き、南海より淡路へ渡る、旅費の乏しきを憂とせず。險阻を履み、風雪を犯し、六十六國のなかばを経歴し、あるは里老へ問ひ、あるは舊圖に考へ、苦辛をその著述のためへ辭せず、日月はたび

ねに移れども、その志移らずして、いよく精力を盡しけり。

丁卯の歲、北虜邊塞を亂すとの風聞あり。脩靜、江戸へあり、ことこの由を聞きて、憂かつ憤に堪へず、不恤、緯五編を著し、上書して、之を國老の執事にたてまつりぬ。とあくする程、山陵志やうやく稿を脱しければ、刻本よせまくほりするに、もとより、擔石の儲なければ、同志へ告げて、未刻已前に入銀を促し、且、その友、鍵屋靜齋等の資を借りて、製本全くなりしるば、を京師に獻り、又、關東の縉紳、并に有職の人々も、まゐらせけり。然る



に、その論處士浪人のあげつらふべきことにあらず、贅言分に過ぎ、思み憚らざるに似たりとて、市のかみの廳にめされて、その條々を詰られしに、脩靜、律令を引き、古實を證として、答へまうること、理にあらなひしるば、かさねて咎めはなかりけり。

これより、慷慨嗟嘆して身の禍をあらへりみず、日ごろの剛腸を鼓し、記文一編を綴りてけり。その事、禁忌にふるゝをもて、市のかみより聞えけむ、召し問はむとせられし、林家の門人たるよしを聞るれ、まづ、祭酒を告げられしかば、祭酒、脩靜

を招きて、件の記文をまゐらせよとありけるに、答へ申せやう、件の拙文は、一時漫戯の稿本なりしを、何がしに貸したりしが、いく程もなく失ひて、今は一ひらも候はず。仰の趣あることまり候へども、なきものなれば、せむすべなし。この儀、ひたすらに、御賢察を願ひ奉ると陳せしかば、祭酒、脩靜を退かせ、又、家臣をもて問はしめ給ふ、陳すること始の如し。家臣、之をまこととせず、なほさまづ、詰りしるば、祭酒、之を推し止めて、威をもて逼るは、要なきわざなり。利害を説きて論さば、足りなむ。問ふこと、再三再四にして、申すこと



の違はぬも、實は失ひたるならむ。おきねくんと  
 止められて、宿所にかへし給ひきとぞ、程へて後  
 に聞えける。  
 此の事、世間へ聞えしかば、知るも志らぬも、おし  
 なべて、驚嘆せずといふものなく、疎きは愚とし  
 てこれを嘲り、親志きは憫めども教ふるものも  
 あらざれば、あなや、不測の罪に、身を喪ふべきあ  
 と、咄みしに、祭酒、愛顧のとりなし、やよりけむ  
 又、母に孝なるよし、正ま知られたるにやあらむ  
 させる御告もなありけり。元園小説

第二十七 蒲生君平の傳二

瀧澤馬琴

は、トめ、山陵訪求のため、京へ赴きし時、彼の地へ  
 は、絶えて知る人なかりき。當時、小澤蘆庵は、古學  
 を好み、萬葉風の詠歌に名たかき、隱逸なりと  
 かねて聞きしかば、渠がたをけをあらばやと、そ  
 の京に入りし日、やがて、蘆庵が宿所をたづねて、  
 おとなふし、伴りて、某は、下野なる宇都宮のほと  
 りにて、蒲生伊三郎と呼はるゝものなり。琴を好  
 み候へとも、田舎にはよき師なし。あるトの翁は、  
 琴の妙手よて、おはするよし、東野のはてまでも  
 かくれなし。よりて、御弟子とならまくほりして、



はるく、と來つるにて候ふといふ。その僕、心得て、奥より入り、かくと告げよけむ。蓋庵、聲を高くして、あな、無益よもどはるゝものゝな、汝、出でて去か答へよ。あるは久しく客を辭し、交を絶ちたれば、都のうちたよも、親しうものせるは稀なり。琴はわかゝりし時、かき鳴らしたりけるを、遠近の人よ知られて、彼にきかせよ。此に教へよといはるゝが、うるさければ、近頃うち摧きて、薪にかへたり。あゝれば、所望よ従ふべくもあらず。他よゆきて、求め給へといふ聲、蒸襖一重を隔て、定かよろ聞えける。

脩靜は、僕が去かゝるといふをもまたず、更よ、推しかへして曰く、翁の御答は、つばらよ洩れきゝたり。某なほ一言あり、願くは、枉げて聞き給へ。われは、下野の儒者なり。去かゝの志願あれば、こばしは江戸よ遊學し、こたび、都にのほりしあども、相識れるもの絶えてなし。翁の古學を好み給ふと、その氣質の俗ならぬとは、あねて聞く者あら、いひ寄るよしのなきまゝよ、琴を學ばむため、に、來りつとせいひしなり。こは、長者を欺くよ似たれをも、その空言は、やむことを得ざるより出でたり。若、たいめせられなば、肝膽を吐き、志願を



告げて、翁の資を貸らむとほりす。かくても心よ  
 稱はずば、退けられむこと、勿論たるべし。今一た  
 び、和殿を勞せむ。このよし執りつぎ給へといふ。  
 蘆庵もこれを洩れきゝて、さりとは、思ひがけざ  
 りき。くしきまれ人なり。たいめせずば、くやしき  
 事あらむとて、となたへと申せとて、やがて、面を  
 合せせけり。

脩靜、ふあく歡びて、はやくより、思ひ起えし志願  
 のよしをとき、山陵志著述のために、ふるき陵を  
 尋ねむとて、旅寐する事の趣、しるくと語りい  
 づるに、蘆庵、ひたすら感嘆して、足下は得がたき

A. d

學士なり。さる志あらむには、わが庵も杖をと  
 め、とらわたりのみさゝぎを、煮つゝ訪ね求  
 め給へとて、他事なくもてなしけり。

これより、脩靜は、日毎に、古陵をたづね巡るに、  
 ともすれば、日くれて歸るを、主は、みづから、風爐  
 を焚きて、浴させぬ。老人の心づかひ、むね苦しと  
 て、いなめをも従はず。こは、ひたすらに、客を愛す  
 る故のみならず。われも、ある奇人を宿すこと  
 の歡ばしさより、足下の疲勞を慰め、國のために力  
 をつくす人の助けとならむとてなり。必、いなみ  
 給ふなどて、後々までも煮かしてけり。鬼園小説



第二十八 求麻川一

橋 南谿

肥後國求麻川は九州第一の急流なり。源遠く那須椎葉山五か村邊より出で、四十里ばかりも流れたり。殊に大川にて、求麻郡の真中をつらぬき、求麻の人吉の城下を過ぎて、八代に至り、肥後の海へ入る。予が歸路は相良の御船にて、此の急流を下りぬ。船はもとより輕し、人も纒ふ予と僕と二人に、船人三人、都合五人乗なれば、飛ぶが如く、八代まで十六里の川を、纒二時に下り着きたり。其の頃は三月のすゑなれば、春水殊に多き。人吉の御城下、青井の宮の前より船に乗れば、送

別の人々、おびたしく打ち集ひ、名残の恨いふもさらなり。高橋、雨森、石田の三士は、猶舟に乗り移りて、酒肴なを携へ、纒を解けば、もとよりの急流、見送の人々は、霞の中に入りて、招く扇もはや見失ひぬ。盃一ふたつめくらを間ふ、渡といふ所まで下りぬ。人々は、つきぬ名残なり、歸の陸路も遠ければ、こゝよりあがりたまへと、まゝむるに、いづくまでといふ限もなければ、人々も襟をうるほして上りぬ。予も去ばし舟をはなれて、又、酒一ふたつ酌みて別る。是より下、水逆巻き落ちて、殊にまみやゑなり。船



はいと小さく、細く作りて、首尾に梶を付けたり。是は眞逆様に大岩より流れかゝりたる時、あどばかりの梶にては、船の廻る事遅きゆゑに、さきにも付けけるなり。常に、さきの梶を第一より動かして居て、岩角を避け、思ふ方より船をめぐらさ。又、中程に楫をもて、一人立てり。是は、船を前後左右に動かすためなり。此の三人の船頭、まばらくも油断せず、船を操る。浪、殊に逆巻く所にいたりては、舟の兩傍に、高き板を立つ。是は、浪の舟中にいらざるやうとなり。十六里の間に、四五る所は、至つて艱險の所ありて、浪の高きこと山の如く、怒れる

岩角、浪の間にあひたゞしく、時ち出づ。あゝる所にては、領主なごの通行の時は、瀬越とて、其の前後、四五町、或は、八九町ばかりも、船を離れて、山に登り、此の險惡の瀬を越して、又、船に乗り給ふとなり。西遊記

第二十九 求麻川二

橋 南谿

予は、いと珍しく覺えぬれば、興より乗下て、其の瀬をも、船より乗りながら下りぬるが、其の目ざましき事、筆の及ぶべきにあらず。渡より下つ方は、兩山けをしく、時ちて、峰は頭の上より臨み、流、殊よせまりて細く、怪巖、巖々として、屏風をたゞめるが

三十八 求麻川二 南谿



如く、壁をつけたるが如く、龍の騰るがごとく、獅子の踞るがごとく、或は、雜樹影茂れる中より入るかとするれば、松杉森々たる岸より臨み、或は山吹の散りかゝりたる、躑躅の咲きそろひたる、山櫻のおのが梢とあらはれ出でたる、千景萬色、眸をめぐらせよ從ひ、兩山、只、走るがごとくにして、李太白が輕舟既過萬重山と詠せしは、ある境にもどろ、思ひいでらるゝ。彼の巫峽の急流は、唐土第一として、舟の下ること、疾鳥迅雲も及ばずといふも、いかであるには過ぎむ。程なく、八代の井出といふ里につきぬ。誠よ、舟中の心よきこと、今も

忘れがたし。日向より、求麻よ入りしも、兼ねて聞きつる急流を、船して下るべきためなりけるが、日頃の望たりて、いと嬉し。求麻の地は、深山の中にて、廣大の平地なり。別に一世界の如く、仙境ともいふべし。他國より出でいる路、日向の嘉久、藤口と、此の求麻川筋と、二道のみなり。此の川の傍に、山路あれども、絶険よて、殊に細し。されば、相良侯にも、東都御參勤の時は、此の川を船よて下らるゝとなり。家中の面々も、皆船なり。誠よ、數百里の海上を経て、東武より出づる事なれば、家中の人々も、其の妻子親友など、此の



新編 日本書紀 卷之六十一

四十一 和善會 鹿尾

川はたゞ出で、見送の時、殊々あはれなる事なるべし。其の時に、船の纜を解くやいなや、陸より船の中の人々、水をかくる事あり。舟の人々、笠をへたて、水を防ぐ。此のまぎれに、急流の事なれば、數十町くたり過ぎて、涙をそそぐひまなく、せや見送の人影も見うしなふとなり。予が發足の時、其のこどくなりき。誠に、つきぬ名残に、落ちくる涙せきかねて、取る手さへ放ちあねたるに、水をそそぎて、船を飛ばせ。陸地の別に異にして、物いひかけはひまもなく、速にてよけれを、又、更に心ばそくあはれなり。西遊記

第三十八樓記

松尾芭蕉

寛文  
後西院天皇  
將軍家綱

芭蕉名は宗房、通稱を金作、又、甚七郎といひ、桃青、風蘿等の別號あり。伊賀の士なりしが、故あり郷を去り、寛文の頃、江戸に出で、俳諧に心を潜め、終に、正風の一派を興す。飄遊風雅を事とし、秀吟、頓多し。元祿七年、浪華の客舎に歿す。享年五十一なりき。

美濃、國長柄川にのぞみて、水樓あり。あるを賀島氏といふ。稻葉山、後に高く、亂山、左右にかさなりて、近からず、遠からず。田中の寺は、杉の一むらゝかくれて、岸にそふ。民家は、竹のかこみのみどりも深し。さらし布、所々引きはへて、右に渡船浮べり。里人の行きあひしげく、漁村、軒をならべて、網をひき、釣をたる。おのがさままもたゞ、

新編 日本書紀 卷之六十一 四十二 和善會 鹿尾



新國文賣本  
一の巻上

四十二種言會藏版

瀟湘

此の樓をもてなすに似たり。暮れがたき夏の日も忘るばかり、入日の影も、月よかはりて、波にむすぼるゝ、あがり火の影もやゝ近く、高欄のもとに鶉飼するなぞ、誠にめざましき見ものなり。あゝの瀟湘の八のながめ、西湖の十の境も、涼風一味のうちよ思ひためたり。もし此の樓に名をつけむとならば、十八樓ともいはまほしきなり。

此のあたり目よ見ゆるもの皆涼し。風俗文選

第三十一 勇婢小萬一 三熊思孝

攝津國某城主はもと豊臣秀頼公に仕へて、北の方もろとも、大坂の城中に居給ひしが、度々直諫

して旨に逆ひければ、逐電して跡をくらまし給ふ。其の北の方と、八歳の兄君、三歳の妹君と、捕はれになりて、城内のかとかなる所に籠められておはしたり。明暮、夫君の事をのみ歎きて、過し給ひしを、婢女こしもに小萬といへるが、かひとくしき女にて、候は都の清水寺におはする由を聞き出で、北の方に告げゝれば、いかにもして、そこに行かばやと思しければ、人目繁きに思ひ煩ひ給ふ。小萬、また、城中よりの間道を考へ、水門より出で、淀川を渡らば、易かりなむと、みづから、物見し終りて後、北の方に申し、まづ、番袋に手廻の調度、衣

新國文賣本  
一の巻上  
四十二種言會藏版



袋なぞ取り入れ、頭に戴きながら、夜に紛れて、彼の水門より忍びいで、淀川を泳ぎ上りて、とある松影に袋をかくし、又、およぎてかへるさに、目を付けて、小船の主もなきを見出たし、おのれは水にひたりながら、舟を押しして行く。折しも、棹さへ流れきたれば、拾ひとりて、蘆原の便よき所に、舟を隠し、北の方の御前に参り、兄君をみづからの脊に負ひ、妹君を北の方の脊に負はせ、参らせ、辛うとて、彼の舟にとり乗せ申し、棹さして、かの番袋を取り出たし、ほのくらき月かけに、たどるたどる、只、あたりの女房の物詣のけはひに、取りな

他 動詞の自

しけれぞ、夜明けゆけば、行きかふ人々、見咎めて、たゞ人とは見おすなぞ、いふをきこしめして、北の方は心苦しう、いとゞ道を急ぎ給ふ。續近世時人傳

第三十二 勇婢小萬二 三熊思孝

山崎のはとりにて、いとむくつけき男、あとさきになりて、いつくにおはする人ぞといふ。清水詣するもの也とのみ云ひて、過ぎ給ふに、男思ふ所ありげに、走り過ぎしが、五條の東までおはしたる時、彼の男、大勢のわるものを引き具して來たり、四方より圍みければ、驚きながら、北の方、聲をいらゝげて、山たちら、道を遮るは、何のためぞと



罵り給へば、一人がいふ、まづ其の若子わこ、たゞ人とは見えねば、送るべき所へ送りて、賞を得む。つぎに、女房のみめうつくしおはすれば、我が思人とせむ。其の次には、番袋のうちうちに、よき物あらむをとりむと也と、いひもあへず、袋を取りにかゝるを、北の方、小萬、共に、用意の懐劍をぬき出たして、切りてまはる。

賊は唯、手取にせむとあしらひしが、強く切り立てられて、逃げむとしては、又、集り、終に、若君を奪ひて、逃げむとす。北の方、人の手には、渡さすと、賊が首を貫きて、若君をも、一刀に切り給ひ、今はこ

れ迄と思し、最期の供奉せよと、直に四人まで切り倒し給へば、小萬も六人まで切りけり。其の他、手疵を負ふ者、數しれず。ちりぐに逃げんるが、北の方も、數か所の手疵に堪へたまはず、清水の馬こゝめに休らひ、せめて父君に、妹を見せよとの給ひて、息絶は給ふ。此の北の方は、世に雙なき美人にて、然も筆をよくし、和歌を好み、長刀、又、殊に上手にて、おはましかば、此の時も、かく懐劍わざにて、荒くれ者を切りたて給へり。其の詠歌のうち、

曉乃月も入るさ乃山かけに



和歌集 卷之四十四 和歌集 卷之四十四

なぞいねむて乃さを鹿乃聲  
といへるを聞きぬ。かばかりの人の思はざる難  
に身まかり給ふこそ悲しけれ。さて、小萬は、同  
道にと思ひしかども、妹君のために、力なく思ひ  
止りて、あたり近き寺を頼みて、御衣なをも布施に  
して、御からをかくし、追善をたのみ、扱こ、はい  
づこと問ふに、清水寺のよしを答ふるに、御臺所  
のため、いと々残多く、かなしさをやる方なけれ  
父君のありかを尋ね得て、妹君を渡し参らせけ  
り。騒動にも、脊に負へる疵、一所のみにて、猶健な  
りきとなむ。忠にして智あり、志かも勇猛なるは、

紫式部  
藤原為時の女  
長じて、源氏物語  
を著せり。

上東門院  
一條天皇の中  
宮彰子。

清少納言  
清原元輔の女  
に、一條天皇  
の皇后定子  
に仕へた女  
名あり、枕草  
紙はこの人  
の草筆なり。

世にめづらしき女といふべし。續近世時人傳

第三十三 女の心得 三熊思孝

昔、紫式部は、いとけなきより、其の才秀で、父も、を  
のこならざるを、恨みける程なりしかども、文讀  
むことを、召しまつはす者にもつゝみて、一とい  
ふ文字をたに、知らぬ者のさまにて過し、上東門  
院に、史記を教へ参らすなをも、いたく忍びた  
る趣、其の日記に見えたり。同ト世に、清少納言が  
ざはがり、口がしこくて、男を物ともせず、大進生  
昌といへる博士を、さいなみたるなをも、今思ふ  
にもにくげにて、後に落ちふれたるなをも、聞くに

新編 文藝 卷之四十五 貴書 卷之四十五



新編文藝叢書  
一の巻上

四十五 春 幸 倉 庫 蔵

も親しむ人もなかりけるにやとさへはかられぬ。男も此の女房なせに及ぶべき才はむかし今稀なるべきに猶かう思はるゝものをまいてなみくくの女なせいみづくとも物の數かは唯あれをもなきがとくすてふ教を思ふべくこそ。因に思ひ出でしことはおのれまた壯なりし頃、中京にある家のひとりむすめ、文よみ、歌よむことを好みたるが親、聲をりして家を繼がせたる時、其の聲は無下にむくつけくて、すぎはひのことより外は知らぬ人なりしかば、此の女も、年頃の嗜捨て、忘れたる如くにもてなしけるを

いかにと問ふ人ありしかば、ひそかに答へて、他より來たる夫なれば、よろづにつけて、あなづらはしくもてなされむとや疑ふべき。まいて、文雅のことなせは、心高く思はれむもうるさくてといひきとなむ。此の用意たふとむべし。續近世時人傳

第三十四 霧島山一 橘 南谿

海陸二日路をへて、霧島山に入り、數十町のぼりて、霧島の宮居の前に着く。二神垂跡の地なれば、宮居、今にいたりて殊に美々しく、此の近國にての大社なり。伏し拜みて、黄昏に及びぬれば、傍の山下坊といふ坊に宿す。この坊にて、先達の案内

新編文藝叢書 一の巻上 四十六 續近世時人傳



者を宵の間にやどひ、明朝夜の間より登山す、雜樹生ひしげり、日かげたに洩れざるほ色の山を、まかとしたる道筋も、見ぬざるに、只案内者のあとに従ひ、ひたのぼりに登る。その間、奇樹、異草、名もしらす、目なれぬもの、甚多し。これは南方暖氣の山なれば、生ふる草の品類も多きなるべし。全體、草木、北國の山なるとは、格別に種類多し。かくの如き所を、五十町のぼりつくせば、それより上は樹木一本もなし。只芝の如き草のみ生ひたり。其の所にいたれば、四方豁達とうちはれ、薩隅、日の三州、一望の中にいりて、衆山は波濤のごとく、

大海は青疊を敷きたるがごとし。其の中に、櫻島山、突然と秀て、盆石をおきたるが如く、絶頂より白き煙、四時に立ちのぼりて、香爐の如し。景色無雙、筆につくしがたし。さて、件の草ばかりの山をのぼる事、又五十町、それより上は、草もなく、只栗はその焼石ばかりなり。

と、に至りて、登ます、急峻なり。扱、このあたりよりうへ、段々登るに、まがひ、天地のけしきや、變ト、不時に、下の方より雨そ、ぎ來り、あるひは、風横さまに卷きく。又、眺望のいとまなし。それより、二十町も登りて、馬の脊越せこといふ所にい



たる。また、御鉢めくりともいふ。此の所は、のぼらず、只、平にゆくといへども、左右皆、谷にて、劔の上をゆくごとく、足のふむところ、纔に、馬のせなか程なれば、馬の脊をどはいふなり。足をかければ、栗の如くなる焼石、左右の谷へなたれ落つ。其の行くところの狭きをこるべし。

さて、左の方は、萬仞の谷にて、底は雲にて、眼及ばず。右の谷は、ふかさ三四町、或は五六丁にて、谷にみちて、猛火燃ゆあがる。此の馬の脊越にかゝりて後は、只、何となく震動して、地軸、只今くたけ折れて、此の山、微塵に成るやうに覺ゆ。また、暝きえ

もいとぬ氣ふき來り、あるひは、墨の如くなる雲うづまき來り、同行のものさへも、一向にかくるる事もあり。あるひは、前後左右に異形の雲煙あらはれ、鬼神の如く、佛神の如き事もあり。あるひは、足下より虹たちのぼり、豎横にたなびきて、織りなせるがごとくなる事もあり。又、天地共に金色になる事もあり。其の外、奇怪ふしぎなかなかいふもおろかなり。

静に是れを考ふるに、是皆、谷一面の猛火によりて、又、陰氣もあつまり來り、火の上に雨そそぎ、雲霧覆ふがゆゑに、水火相激して、震動雷電し、又、水



火蒸蒸によりて、種々の形みゆるなり。又硫黄焰硝の氣あるうへ、それに水をそゝぎたるゆゑ、種々の匂もいづる事なり。又折々一陣の風ふき來る事あり。此の時は先達教へて、急にうつ臥に、倒れふさこむ。匍匐はらばにならざれば、風のため、此の身をとりたれて、猛火のうちに舞ひ落つるなり。折節は、風の爲に取らるゝものあるゆゑ、此の山にて紛失する人多しといふなり。予も殊に、此の風を恐れて、少しの風にも、急にうつぶこになり、地に取り付きて、風にはなたれざるやうにせり。恙はげばこにて、又、忽に風もやみ、天は

るゝ事もあるなり。須臾の變幻定、ある事なし。此の所に取りかゝりしより、さ恙も勇氣の若者、大に恐れ、足戰きて、立つ事あたはず。われと先達と、前後より介抱して、いろくゝと耻ぢ恙め、恙ばしが程は引き行きしかど、後には目見えず、顔色變せしかば、いかにとも恙がたく、殆、難儀に及びしに、先達いふやう、けふは、山も格別にあらじ。殊にかゝる人引き具し行かむ事、いかにも叶ふべからず。登山もこれまでなり。これより下山すべしといへば、力及ばず、本意なく、それよりくたりに向ふ。西遊記



新編文讀本 二の巻上

四十九 和言會

第三十五 霧島山二 橘 南谿

扱夫より、纒に十町ばかりを下れば、天氣晴朗にして、風おもむろに、四方の眺望、初のごとし。若くは、若者も、けしき常のごとくにして、さきには、いかにして、かばかりは、恐ろかりつるにかと、三人打ち笑ふ程なり。  
われ、つくづく思ふに、かゝる事のありて、妨にもなるべからむかとして、凡庸の人を同道せざりとなり。然るに、今、若者が爲に、予までも絶頂をさしめずして、是より下山せむ事、生涯の遺恨なるべし。

し。何とぞして、一人なりとも、登りたきものをと、おもひめぐらして、先達に、これより絶頂までは、道程いかはぞ有ると問ふに、馬の脊越の長さ八町、それを過ぎて、急に登るところ、十町ばかりもやあらむといふ。それならば、纒の道なり。紛れ道やあると問ふに、兩方谷なれば、紛るべき道なしと答ふ。さらば、あまり残念なれば、予は獨歩して、絶頂に登るべし。此の所に、若者を守り居て、我が下り来るをまちくれよ。これより下は、案内なくしては、一步もすゝめがたければ、かへすゝも頼むなりと、いひすてゝ、とむるをも聞かで、足を

新編文讀本 二の巻上

五十一 讀言會



ばかりにのほりしに、件の馬の脊とびに至れば、  
 天地たちまち變つて、初のごとし。先達がをしへ  
 に任せ、折々はうつふしになりて、風をさけ、千辛  
 萬苦して、馬の脊越、八町が間、走りぬけたるに、先  
 達がいひし如く、それよりは、眞直まっすぐに登る所あり。  
 此の所にいたれば、天地、又、常の如くにして、奇怪  
 なし。只、いきを限りに登る程に、遂に、絶頂にいた  
 れり。  
 絶頂は尖りて、纒の地面に、天の逆鋒あり。これを  
 見得し時のうれしさ、何にかたどへむ。逆鋒のあ  
 りさま、全體は、唐金からがねの如くに見えたり。風霜



にさらせるものなれば、青く鋪びて、まかど知れ  
 がたし。長さ一丈餘ばかり、ふとさ大なる竹程に  
 て、さかさまに地中にたち、其の石突いづつの端の所に、  
 南面に、鬼面のごときもの見ゆ。これも、風霜にさ  
 らされたれば、鼻目まかどは見えがたし。土中に  
 入りたる先の方は、何程深く入りたるか、知るべ  
 からず。只、絶頂に、此の鋒一本のみにて、外に堂宇  
 等のごときもの、一もなし。神代の舊物なりや。其  
 の程は、しらすといへども、實に、三百年、五百年位  
 の近きものとは見えす。天下の奇品なり。もし、銘  
 なども有りやと、くはしく見しかども、見えず。ま



ばらく此の絶頂に徘徊するに、天氣晴朗にして、  
 四方目の及ぶ限り、見渡り、其の心地よき事、今  
 に忘れがたし。  
 されども、かゝる所は久しく留るべきにあらざ  
 れば、いそぎ下りたるに、馬の脊越にいたれば、又、  
 初のごとく、天地晦冥して、怪異、益甚し。ことごとく  
 く筆に盡すべきにあらず。殊に、山上の有様は、人  
 間に洩さざる山法なり。恙なく、馬の脊越をこえ  
 て、ひた下りに下るに、遙の下に、先達、若者、かすか  
 す見えて、大さ豆のごとし。嬉しくて、いそぐはそ  
 に、下るとはなしに、すべり落ちて、須臾の間に、二

名護屋  
肥前に在り。

人の前に着きぬ。恙なかりし事のみ、どもに悦び、  
 其の夜、くれ過ぐる頃、宮居の傍の坊にかへりぬ。

西遊記

第三十六 淺野長政の直諫

新井白石

太閤、朝鮮の軍はかゝりしからぬを怒りて、徳川  
 殿を初め、宗徒の大名を、名護屋の陣に集め、今は  
 秀吉みづから向はむと思ふ利家、氏郷に大將せ  
 させ、三道より向ひ、朝鮮を打ち破り、まつすぐに  
 大明を攻め入らむ。本朝の事は、家康さてまじま  
 せば、心よかゝる所なし。方々、いかにか思ふと仰





あり。徳川殿、御氣色損<sub>レ</sub>て、利家、氏郷に向ひ給ひ、日本の大名多き中に、方々二人えり出されて、一方の大將を賜<sub>レ</sub>らむこと、弓矢とりての面目、何事かこれに過ぎむ。家康、いやしくも弓馬の家に生れ、戦の中に年老いぬ。今、この大事に及びて、いかで人の跡に留りて、徒に、本朝を守り候ひなむ。少勢<sub>一</sub>は侍るとも、家康も軍勢をひきゐて、必、一方の先陣を承るべし。方々の御推舉を仰ぐ所に候ふとのたまひしに、彈正少弼長政、進みいで、しばらく候ふ。徳川殿、殿下この年月の御振舞、昔の御心とや思し召す。年經る狐の入り替りて候ふ

尊敬をあらはす動詞

何條 なでふ

を、何事をか宣ふべきと、申しも果てぬに、太閤、御佩刀<sub>一</sub>手を掛けられ、やあ、秀吉が心<sub>一</sub>狐の入り替りたる謂きつと申せ、申し損<sub>レ</sub>なば、しや、首打ち落してくれんすと仰せけり。  
彈正、ちつとも騒がず、長政等が如きは、何百人が首刎ねられむにも、なでふ事か候ふべき。抑、この年頃、由なき軍起りて、異國のみならず、本朝も、父を討たせ、子を討たせ、兄弟を失ひ、夫に別れ、妻に離れ、歎き苦しむ者、天下に滿つ。又、それに兵糧の轉漕、軍勢の賦役、六十餘州が内、悉、荒野となる。今日、御參向あらむは、五畿七道の間、竊盜、強盜



徳川殿いかに思ひ給ふとも、いかでこれを防ぎて、動きなく御跡を守り給ふこと叶ふべき。此等の事を思ひてこそ、先陣とはのたまふならぬ。されば、昔の御心ならむにも、かほその事なぞか御心づきなかるべき。かゝる御心のつかせ給ふ事、これたゞ事にあらず。一定、古狐の入り替つたるまは候はずや。賤き者の諺に、人どらむとする鼈も、必、人よどらるとは、この御事よて候ふぞと、懼る所なく申しければ、太閤、鼈よもせよ、狐よもせよ、おのゝ主と頼みたらむ者に、雑言を吐く條、奇

五十三 和言會流

徳川殿いかに思ひ給ふとも、いかでこれを防ぎて、動きなく御跡を守り給ふこと叶ふべき。此等の事を思ひてこそ、先陣とはのたまふならぬ。されば、昔の御心ならむにも、かほその事なぞか御心づきなかるべき。かゝる御心のつかせ給ふ事、これたゞ事にあらず。一定、古狐の入り替つたるまは候はずや。賤き者の諺に、人どらむとする鼈も、必、人よどらるとは、この御事よて候ふぞと、懼る所なく申しければ、太閤、鼈よもせよ、狐よもせよ、おのゝ主と頼みたらむ者に、雑言を吐く條、奇

等、蜂の如くに起りて、安き所も候ふまじ。徳川殿いかに思ひ給ふとも、いかでこれを防ぎて、動きなく御跡を守り給ふこと叶ふべき。此等の事を思ひてこそ、先陣とはのたまふならぬ。されば、昔の御心ならむにも、かほその事なぞか御心づきなかるべき。かゝる御心のつかせ給ふ事、これたゞ事にあらず。一定、古狐の入り替つたるまは候はずや。賤き者の諺に、人どらむとする鼈も、必、人よどらるとは、この御事よて候ふぞと、懼る所なく申しければ、太閤、鼈よもせよ、狐よもせよ、おのゝ主と頼みたらむ者に、雑言を吐く條、奇

色代  
目禮の事なり

怪なりと、躍びかゝらむとし給ふを、利家、氏郷おし隔て、人々御前よ伺候せり。長政が首刎ねられむに、御手を下さる。までも候はず。其所をかり申せ、彈正といはれて、長政、さらぬ體よもてなし、人々よ色代しておのが陣よ歸る。海輪譜  
第三十七 澤野原孫太郎 湯淺常山  
明石掃部頭全登、大坂に籠りしが、落城の後、討死しけるか、落ち行きたるか、詳ならず。明石が士、澤野原孫太郎といふを生け捕りて、明石が行方を問ふに、知らずと答ふ。さらばとて、拷問に及びけられども、更にいえず。あまりきびしく責められて、

新編 徳川實録

五十四 續徳川實録



涙を流しければ、行方を言ふにこそあれとて、如何にと問ふに、澤野原いひけるは、關東の兩御所の運、強くおもしろし候ふを、感<sub>ト</sub>奉りての事候ふ。士たる程の者、骨を刻まるとも、主君の行方を申すべしや。この度、大坂軍に勝たば、兩御所落ち行かぜ給ふべし。その時御邊たちを搦めて、今我を責められ候ふ如くならば、主君の行方を、白狀すべき心なれむとそ、我を責めらるゝならめと思ひて、覺えず涙の流るゝなりと申しければ、人々詞なかりけり。  
たゞ  
東照宮きこし召し、類なき忠義の士なり。よく勞

り候へとて、御救ありき。今、細川家にその子孫あり。又、池田の家もあり。澤野原は、備前磐梨郡の村の名なり。孫太が一族、この村より出でたりといふ。掃部が居城の跡、備前の和氣郡和氣村の東の山の上にある。常山紀談

第三十八 滄浪の水

室 鳩巢

昔、孺子ありて、滄浪之水清兮、可以濯我纓、滄浪之水濁兮、可以濯我足と歌ひけり。この歌の本意は、聖人は物に凝滞せず、世と推し遷るとの意にて、かく歌へるまでもあらむかし。それを、孔子聞き給ひて、水澄む故に、人、纓をあらひ、水濁る故に、人、足



藻にすむ  
虫  
われからとい  
はむ爲の序詞  
なり。

を洗ふ。纓をあらはるゝも、足を洗はるゝも、水の  
自取る事なり。小子よく聞けと宣へり。されを榮  
辱禍福皆藻にすむ虫のわれから招くといふ事  
この歌よても悉るし。たゞ人を咎めずして、手前  
を慎むにしくはなかるべし。假初の歌とて、あた  
に聞くべきにあらず。暖臺雜話

第三十九 板倉重宗 新井白石

この人の職にありし時の名譽、天下の稱する所、  
擧げて數ふべからず。その要をとりて、一條をこ  
とにしろす。重宗職に任せて後、毎日決斷所に出  
づるに、西面の廊下よりして、遙に拜する事ありて、

希求の動詞

決斷所に至る。こゝより茶磨一をすゑ置き、明障  
子を引きたて、其の内に坐し、手づから茶ひき  
ながら、訴を聞き分けつ。人皆、この事をもを不審  
しあへり。されども、問ふ事もえならず、はるか年  
経て後、問ふ人ありしに、答へて曰く、まづ決斷所  
に出づる時に、西面の廊下より拜するも、愛宕の  
神を拜するなり。多くの神の中に、殊に愛宕は靈  
驗あらたなりと聞きし程に、所願ありて、かくは  
拜しぬ。その所願といふは、今日重宗が訴をこと  
わらむに、心に及ばむ事は、私の事あらむも、し過  
ちて私の事あらむにも、たち所に命を召され候。



へ。年頃深く頼みまゐらする上は、少しも私心あ  
らむにも、世よ永らへさせ給ふなど、日毎に祈誓  
するよて候ふ。  
また、訴を判つ事の明ならぬは、我が心の事に觸  
れて動くが故なりと、思ひなむ。よき人は、自動  
かさゝらむやうこそあらめを、重宗、それ迄の事  
は叶ひ難く、たゞ我が心の動く静かなるを  
試むるに、茶をひきて知るなり。心定りて静か  
なる時は、手もそれに應じて、磨の廻ること平か  
にして、きしられて落つる所の茶、いかよも細か  
なり。茶のこまかに落つる時よ至りて、我が心も

動かぬと知り、その後、やうやくに、訴を判つなり。  
また、明障子を隔て、訴を聴く事は、凡人の面貌  
を打ち見るに、憎さげなると、憐がまじきとあり。  
かたまじきあり。その品、多くして、いくらと云ふ  
數を知らず。見る所の誠しきと思ふ人の云ふ事  
は、誠と聞かれ、かたまじきと見ゆる人のなす事  
は、何にても皆詐と見ゆ。又、あそれかまじき人の  
訴へ、曲げられたる所あるよと思はれ、悪さげな  
る人の争は、僻事ならむと覺ゆ。これらの類は、我  
が目に見る所よ、心の移されて、彼が言葉を出さ  
ぬうちに、はや、我が心の中に、邪ならむ、正しから



むまがらむ直からむと思ひ定むる程に、訴の言葉  
 葉を聞くに至りては、我が思ふ方に、其の事聞き  
 なす事多し。訴のなるま及びては、あそれが生じ  
 きに、悪むべきあり、悪さげなるに、あはれなるあ  
 り、誠しきに偽りかた生じきが多き事、このたぐ  
 ひ、殊に多し。  
 人の心の知り難き、容をもつて定めむ事、叶ふべ  
 からず。古の訟を聴くには、色を以て聴く事あり。  
 それを覆はるゝ所なき人の事なるべし。重宗が  
 如きは、見る所に就きて、心おははるゝ事多し。又  
 さなきたゝ訟の庭に出でむに、お恐しかるべき

に、まして、生殺を掌る人を見ては、まばゆく、いふ  
 せくて、おのづから、云ふべき事もえいけで、罪ま  
 も科まもあふ人あらむと思へば、所詮、互に、面を  
 見も見られもせぬまも志かトと思ひて、かくは  
 坐を隔つるまて候ふと答へきとぞ。番翰語

第四十 嵐山の櫻 石原正明

花は櫻。さくら多かる山に、松なぞ立ちまとりて、  
 色ぞり分けたらむやうなるが、一しは見所あり。  
 友達四五人ばかり、一年、嵐山の花見に行きし事  
 あり。今日ぞ盛りならむと覺ゆる程まて、あつ散  
 るもあるに、渡月橋のとなたを、川添に、水上の方



春おもし  
ろく云く  
後拾遺集に  
笛の音の春  
おもしろく  
こもるは、  
ちりたりと  
けはなりと  
吹花き

へ行く。風のさと吹きあるに、雪かどばかり亂る。花のどなせの瀧の岩波に、やがてまがひ行くなぞ、いひ知らずをかじ。  
中野三郎といへる人、川中の大きやかなる巖に、腰うちかけて、笛たかやかに吹き鳴したるが、水音も響きあひて、をかじきにかたへにありつる法師、春おもしろくきとゆるはと、打ち誦したりしこそ、折からをかじう覺えしか。この法師、いくの人なりけむ。心にくきけしきなりつるを、物をたし言はて、やがて行き別れつるは、口惜しき事なりけり。年々隨筆

第四十一 安心立命 橘 南谿

春暉、醫を學ぶこと二十餘年、醫學よおきては、和漢古今に譲らずと、竊も獨思ふ。其の他の技藝、年若きより、多端も渡りて、學び弄べり。然れども、何一事、人並にも到れる事なし。とは、修行の功足らざる故なるべし。未熟の藝もて、時にふれ、よく出來たる時、人の稱美を得れば、虚なる事とは知りながら、何となく嬉しき心地し、人の毀を聞きては、悦ばしからざる心地す。但、醫學の事を、他人の評するよし、善しと稱せられても、嬉しくもあらず。悪しと誹られても、怒り腹立つ心、聊もなし。

受身の動詞。



こともみづから安心立命しをる故なり。道義を合  
點する事も、かくの如き地位に到れば、寵辱も毀  
譽も、名利も、心を亂る事はあるまじと思はる。古  
の聖賢は、かくやありけむ。北窓瑣談

第四十二 たのしみ

中井登庵

玉の臺も、膝を容るゝに過ぎず。錦の衣も、風を防  
ぐ外、用なし。魚の、鳥のと、數あるも、腹は満つれど、  
土の如し。かの、やむことなく、富み榮えたる際は、  
味をつくして食へど、物窮りて、望足らず。織物の  
めでたきを襲ねても、膚常に寒きやうなり。みつ  
葉よつ葉に、造りみがきても、住みなれ、目馴れて、

貴  
つみつ葉よ

催馬樂に、て  
の殿は、うべ  
も富みけり、  
ささ草の、三  
葉四葉に、殿づ  
り、くりせりどあ

命令の動  
詞

清風云々、  
李太白の詩  
に、清風兮明  
月、不用一  
錢買。

清らなりとも知らず。かことに移り、となたに渡  
り、いよく、巧みて愈、好む。たとひ、これを樂し安  
しと思ふとも、火の恐、とみに至れば、物皆消ゆ。盜  
のうれへ來れど、寶、或は失ふ事あり。去かど、た  
求むるに易く、失ふに難きものを樂まむは、  
つらく、天地の、おのづからなる景色を見よ。山  
あり、川あり、雨露風雪の、けはひ、いづれか哀とは  
見ぬ。清風明月一錢の買ふことを須ひずと、唐人  
もいひき。求むれど、に至りて、とこしなへに  
失ふ事なし。すべていへば、一年にして、わかつては  
四なり。よつが一に、千年の哀を顯して、近く見れ



ば、たゞ、一日の朝夕にあり。とはすがたり

第四十三 へわが國の武威 藤田東湖

東湖名は彪、通稱は虎之助、後誠之進と改む。水戸家に仕へ、烈公を輔けて、番事に執掌す。文武兼ね通じ、慷慨愛憤、大に勤王の志氣を鼓吹せり。安政二年十月、江戸大地震の爲に壓死せられぬ。年五十。著す所、回天詩史、常陸帶等あり。

安政 孝明天皇、將軍家定。

かしくも、榎原の天皇あらゆる敵を平げ給ひ、

神武の御威徳を以て、天が下まろし召されしよ

り以來、皇朝の威世に類なく、磯城宮の御代にも、

任那國より貢をさし、げ、豊浦宮の御代にも、韓國

まで打ち平げ給ひ、皇子にも豊城入彦命、日本武

尊ましく、將軍も、坂上、田村、磨、安部、比羅夫な

さいへる人々ありて、四方の隈々まで、靡かぬ草

豊浦宮 仲哀天皇をさす。命 豊城入彦 崇神天皇の皇子にして、東國を鎮定し給へり。日本武尊

磨キ

こも、亦、同じ天皇の皇子に、熊襲を征服し給ひき。坂上、田村 桓武帝の時、蝦夷を征伐せり。安部、比羅夫 齊明天皇の御世に、肅慎を征服せり。

時の帝 後宇多天皇。

木もなく、まつろもぬ夷狄もなかりしが、弘安の年に至りて、忽必烈といへる者、蒙古より起りて、漢土を奪ひぬる勢に、つゝのりて、おほけなくも、神國を攻めむと計りしを、鎌倉の執權、北條時宗がはからひにて、蒙古より捧げし使の首を刎ね、まさしく忽必烈を敵になしぬる様を世に示し、防禦のそなへ怠るまゝ、き由を觸れぬれば、天下の人々、すはや、蒙古寄せ來らむと待ち設け、又、かしくも、時の帝、石清水の神に祈り給ひ、御身もて神國の禍に代り給はむとまで、誓をかけ給ふ列あり難き。上も、下も、かくの如くなりければ、其の



科戸の風  
科戸は風神の  
名なり。

宇都宮  
下野國の地

誠天地を動かし、神の御心に叶ひけむ、蒙古攻め  
來りし時に、科戸の風烈しく吹き出して、荒浪を  
起し、十萬人の賊船も、海の藻屑となりはて、纒  
に、三人ならでは、本國にえ歸らざりしハ、實に、心  
地よき事なりき。其の後、豊臣氏、軍を出して朝鮮  
に渡り、彼の玉城に攻め入り、王子まで擒よし、そ  
の威に、明國までも恐れおのゝき、二百年餘の今  
日まで、朝鮮の貢物絶ゆる事なく、まつろひぬる  
ゆゆしき。常陸帶

第四十四 豊臣秀吉 湯淺常山

秀吉、陸奥に赴く時、宇都宮よて、佐野天徳寺を呼

名。

び、物語せさせて聞かれしに、武田、上杉の弓箭盛  
なりし事を申しければ、秀吉冷笑ひ、いかに天徳  
寺、謙信、信玄といふ坊主も、疾く死にたるこそ幸  
ふれ。今にながらへるば、一人に、薙刀をかたげ  
させ、一人に、吾が輿の先なる朱傘をもたせて、  
馬の前に召し具すべきに、この世になければ力  
なし。何條、車がゐり、坐備、皆たはことなりと、言  
はれける。常山紀談

第四十五 水野勝成一 新井白石

寛永十四年、肥前國有馬郡に賊徒起りしかば、追  
討の御使として、板倉内膳、正重昌、馳せ向ひ、九國



新編 國史 卷之六十二

六十二 種善館藏版

將軍家  
家光をさす。

の軍勢を率ゐて、かのたてこもれる城を攻む。城  
いまた落ちざりければ、重ねて松平伊豆守信綱  
をさしむけらる。明くる十五年正月元日、重昌討  
死す。はしめ將軍家、信綱に仰せ下されしは、日向  
守勝成はさる古兵なれば、かれら父子が向はさ  
らむ程は、只、遠攻に軍して、兵うたすべからずと  
ありしかば、信綱、彼處に至りて、軍をとめて、勝  
成が至るを待つ。勝成、わざと日數經て、二月二十  
二日、よろ着きたりける。同トき二十四日、寄手の  
人々、信綱が陣に集りて、軍評定す。戸田左門氏鐵  
進みいで、われ等、仰を蒙つて候ひしにも、相構

か

いひたり  
の音  
うた  
なり  
のう  
なり

へて兵うたすな。謀をめぐらして城をば攻め落  
せとこそ承れ。只、遠攻にて城中、糧盡くるを待ち  
給ふべくや候ふらむとぞいひたりける。  
信綱、勝成に向ひ、日向守殿の御謀承りたく候ふ  
といひしかば、今、天下一統の世になりて、此の奴  
原に力合せむもの、一人もなし。何の恐か有るべ  
き。只、つらを出たさせず、乾し殺して落さむにし  
くべからず。大御所、むかし、高天神城を、かくこそ  
攻め給ひしか。殊に此の城と申すは、古より名高  
き城なりと、勝成若き時、鎮西に流浪せし比より  
承りぬ。あたらしの命、土民、百姓等が爲に失はむ

新編 國史 卷之六十二

六十三 種善館藏版



新編 國文讀本 六十三 積善館藏版

待つべう  
待つべくの音  
便なり。

事謀にあらずといふ。氏鐵、尤に候ふ、かたきの糧  
つきむ程を待つべう。候ふといひしに、勝成、しば  
らく候ふ、戸田殿、今日まで人々の遠攻して、身方  
討たせ給はぬが、よき謀と申す事よて候ふ。城  
の奴原が事、俄に起つて百日よ及び、立ち籠りた  
れば、糧料も、矢種も、はや盡き果てもする物を、此  
の後は、何をかさのみ待ちぬべき。唯、平攻に攻め  
破つてすてられ候へといひしより、されを攻め  
らるべきに定る。藩翰譜

第四十六 水野勝成二 新井白石  
その時、細川越中守忠利、鍋島信濃守勝茂、一同に

進み出で、忠利、勝茂が陣取りし處、無下に城近き  
所なり。二三の城をば、まづ、われ等が手より、攻め  
破つて、見參に入れ候ひなむ。人々の御勢、一同に  
関の聲を合せ、力を添へて給はるべきと、列望み  
申したる。座中の人々、皆心得ずげに見えし所に、  
勝成、わたけ高になつて、此の城を、只、二手よて攻  
め落し給はむこと、忠利、勝茂が佳名こそ、ゆゑ、こ  
かるべけれ。誰か又、見物の場に集りたるやうに、  
よそには、見て居候ふべき。勝成、身不肖には候へ  
ども、むかし、大御所に隨ひ奉つて、十六歳にて軍  
初めして、此の年に至るまで、大小の戦、既に五十

新編 國文讀本 二の巻上 六十四 積善館藏版



編 國 文 讀 本

六十四 和 善 會 藏 版

餘度、つひに人に越えたる事はあらねども、又、人に越されし事もあらず。況、又、時ばかりつくつたる鶏軍したるためし、猶、さぶらはず。かく人々、功を争ひ給はむにも、軍勢多く打れぬべう。覺ゆ。將軍の仰にも、兵な討たせそと。そ侍れ。凡、城を攻むる事、身方の心を一にせでは叶はぬ事、勿論なり。今日の軍の評定は、竹釘軍といふものにて、頭たらむ者はなきに似たり。伊豆、守殿、追討の御使として、御下向あれば、勝成が存する所、この度の大将、この人とこそ存すれ。かの御下知あらむ事いかでか背き申すべき。老人の長居、難義なり。子

無骨  
こちなしの音  
讀にて、分別  
なきこととい  
ふはどの意な  
り。

息美作、守父が代官として、これに留む。御評定の  
一決、御下知をかれに仰せ蒙るべし。この美作、守  
と申す男も、若き時、大坂の合戦に召し具せられ、  
軍のやうをも見たるもの、さのみは無骨を存す  
ま。御暇申す方々として、坐を立ちて引歸りける。  
その日の評定にも、二十八日を以て、諸手一同に  
攻め破るべき日に定めらる。かゝる所に、二十七  
日の朝、人々また信綱の陣に集る。鍋島すでに城  
中に攻め入るといふ程こそあれ、諸手一同に先  
を争ひ、上を下へとひしめく。勝成は、おのが陣に  
在つて、少しも騒がず、手勢五千を引き具し、子息

新 國 文 讀 本

六十五 讀 善 會 藏 版



美作守勝俊が信綱の陣より歸るを待つて、さきがけさせ、本城より攻め入つて、一番に旗を列立てたりける。藩翰譜

第四十七 山内一豊が妻 新井白石  
むかし、一豊、織田家に出で仕へしは、下め、東國第一の名馬なりとて、安土に引き來て、商ふものあり。織田殿の家人等、これを見るに、誠に無雙の名馬なり。されども、價あまりに貴しとて、買ふべき人一人もなく、空しく曳いて歸らむとす。その比、一豊は、猪右衛門尉と申し、が、この馬は、こと思へども、求むる事、いかにも叶ふべからず。家より歸

申し、申せしとするは、わろし。

りて、世の中に、身貧しきは、口惜しき事はなし。一豊、仕の初なり。かゝる馬に乗つて、見參に入りたらむに、館の御感に預るべきを、言ひければ、妻、馬の價、いかばかりよやと問ふ。黄金十兩とこそいひつれと答ふ。妻、さは、思ひ給はむに、その馬、求め給へ。價をみつから參らすべしとて、鏡の筐の底より、黄金十兩取りいで、まゐらす。

一豊、大に驚き、この年比、身貧しく、苦しき事のみ多きうちに、この黄金ありとも知らせ給はず、いかにかに心強くはつ、み給ひけむ。されども、今、この



新編 國文 卷之十一

六十六 和言 會藏 版

感歎詞

馬うべしとは、思ひもよらざりきと、且は喜び、且は恨む。妻のたまふ所、ことわりにてこそ侍れ。さりながら、これと、妾が父の、この家に参りしその時に、この鏡の下に入れ給ひて、あなかし。と、これ、世の常の事に用ふべからず。汝が夫の一大事あらむ時に参らせよとて賜ひき。されば、家貧しく、苦しむなといふ事は、よの常の習なり。それは、いかにも堪へ忍びても過ぎなまし。誠か、この度、都まで御馬ろへ有るべしなを聞ゆ。もし、さもあらむに、この事、天下の見物なり。君、又、仕のは、とめなり。かゝる時ならでは、館ま

小説

感歎詞

も傍輩にも、見知られ給ふべき由もなし。よき馬めして、見参に、いれ給へど、思へば、こそ参らすれといふ。一豊、やがて、その馬求む程なく、都にて馬ろへへのありし時、織田殿、この馬御覽ありて、大に驚き給ひ、あつばれ馬や、名馬や、何者の馬ぞと仰ありしに、これは東國第一の馬なりとて、あき人が引きて参りしが、あまりにあたひ貴くして、誰も買ふ事叶はず、空しく引きて歸るべかりしを、山内が得て候ひしと申す。信長聞し召し、價貴き馬なれば、當時天下に信長が家ならで、買ふべき人なしとて、奥よりはるば

新編 國文 卷之十一

六十七 和言 會藏 版



る引きて來りしを、空しく歸したらむにも、無念の至なるべし。山内は年比久しき浪人ときく。家もさう貧しからむに、買ひ得たる事の神妙さよ。且は、信長が家の耻をもすゝぎ、且は、ものゝふの嗜いと深しと、感と給ふ事大方ならず。これより次第に身を起しきといふ、誠よや。藩翰譜

第四十八 士の心 松崎白圭

白圭名は堯臣、通稱は左吉、笹山、俣青山、下野、守の世臣なり。伊藤東涯に師事し、又、物徂徠の門に入れり。著述に正言、五論等あり。寶曆三年、病をもて江戸に歿せり。時に年七十二。

人の心は、死後ならでは、知り難しといひあへる時、渡邊廣左衛門がいひしは、士の心は、死よても、

寶曆  
桃園天皇  
將軍家重。

猶、これがたし。たとへば、木村長門、守重成、をさなき頃、大坂城中よて、粗忽の茶道ありて、重成の烏帽子を扇子よて打ちけり。重成打ち笑ひ、士の法にては、汝は討ちずてにすべき者なれども、汝を殺せば、われも亦、死す。我は、一大事あらむ時の用に立たむと思ふなれば、汝如きにかふべき命もたず。さる故に、見棄ておくろといひしを、臆病の士なりとて、上下そしりしが、慶長の軍に、智謀隨一の將とよばれ、無二の合戦し、大敵を追ひ靡け、盟の使せる時のさま、海内にかくれなく、元和の戦に、稀なる一戦して、名を世に残しぬ。

イヨアコヤ  
不忠  
不義  
不仁  
不孝  
不悌  
不友  
不睦  
不親  
不和  
不和  
不和



誠にかの一言、露も違はず。されば重成、かの一言の後、程なく病死したらましかば、後生で耻辱の名は遁れず。忠臣はれのが名を顧みざること、昔今かはらずといへども、かゝる明臣は又、稀なり。さる故に、良士の心は、死後にも測り難しと申すなりといひき。窓のすさみ

第四十九 書札文字の死活

菅茶山

書札の文字も死活あり。たとへば、一筆啓上仕候より、御無事御堅固云々、私宅無恙、時候御自愛、猶期後音云々は、何事もなく、書くも、かゝざるも、

知れぬ程の事なり。その間に、この間の寒氣は、弊郷は海濱に氷を見たり。或は半月一月の早なるに、よそには夕立すれども、こゝは降らずなぞいふは、同卜寒暄を叙するにも、その地の氣色も思ひやられて、書狀の文字も活くるなり。

月日の末に、この書認めたる時ハ、雨しきりに降り、時鳥、二聲三聲おとづれなぞ書きたるは、いよいよ、其の時其の人の姿も、思はるゝ様よて、おもころし。長さ三尋あまりある書札にても、死にたるあり。三行四行の書よても、活きたるあり。これらは、書札に限らず、詩歌連俳よても、心づくべき



新編 國文讀本 一の巻 六十九 和言館藏

事なるべし。筆のすさび  
第五十 俳人の書簡 松尾芭蕉  
然れば御約束の水鶏笛送り給はり、忝く珍重に  
存ト候。この里の人々、きゝ馴れず、女子ども集り、  
我を藝者のやうに申しをかしく、行脚先、國所に  
より、一向、音を知らぬ人、御座候。吹きてきかせ候  
へば、悦び申し候。鹿笛も木曾より貰ひ申し候。時  
鳥笛も御座候。はこきもの候。水鶏笛作る  
人は、つくるべしと存ト候。乍御面倒、これも御聞  
き可被下候。出来候は、御頼み可被下候。何よて  
も相應の物、細工人に謝禮可致候。殺生の道具な

風人  
風人は風流人  
といふほどの  
意なり

がら、水鶏笛も只、吹くはをかしく候。初鴈の聲、水  
鶏たゝくなぞ、歌も、發句もつくる人の、さし  
竿よて捕り、綱にかけなぞ致し候は、むい、口と心  
と相違よて、名句吐くともうそつきと云ふ者よ  
候へば、誠の風人より見れば、あはれなる事よて、  
たとひ、殺さずとも、雲に飛び地に走り候鳥を、  
小き籠よ入れ、樂となすは、牢番も同ト事よて候  
を、心付かず、籠を並べて、これは二兩の駒鳥なり、  
これは五兩の鶯なりといひて、摺餌に小袖の肌  
れし脱ぎ、高祿の人よも、淺間敷様する人、武林連  
中にはあるものよて、かの開籠放白鷗の詩意な

新編 國文讀本 一の巻上 七十一 貴尊官藏反



伊賀云々  
芭蕉はもと伊賀の士なり  
土芳  
土芳は伊賀の俳人にて、芭蕉の門人、享保十四年歿しぬ。  
一笑  
一笑は加賀の人なり。  
編者註  
七十  
和善會藏

と、教訓可被成候。伊賀家中の人々も御坐候間、土芳もこの事申しつかはし候。

鶯や餅も糞する椽のさき

二月十六日

一笑様

第五十一 短歌四首

月前梅

野々口隆正

さく梅の香をなつかしきみ明かす夜ハ

月もこずゑをはなれざりけり

柳

村田春門

隅田川わたし虫つまの手ホさびに

結びてはなつ青柳の絲

花

近藤芳樹

咲くたびに色やはかはるかそらねを

ことしも花のめづらしきかな

川邊納涼

伴信友

月きよき鴨の河瀬の夕風に

夏もながれてゆく心かな



國文讀本  
七十一  
積善會藏

新編國文讀本二の卷上 終

明治三十三年  
十一月五日  
終

明治廿八年三月十八日 印刷  
明治廿八年五月十日 再版印刷  
明治廿九年六月廿日 訂正三版印刷  
明治三十一年九月五日 版權讓受

新編國文讀本二の卷上  
正價金廿五錢

版權所有

編述者 藤井乙男  
發行者 石田忠兵衛  
印刷者 堀越幸

特約販賣店

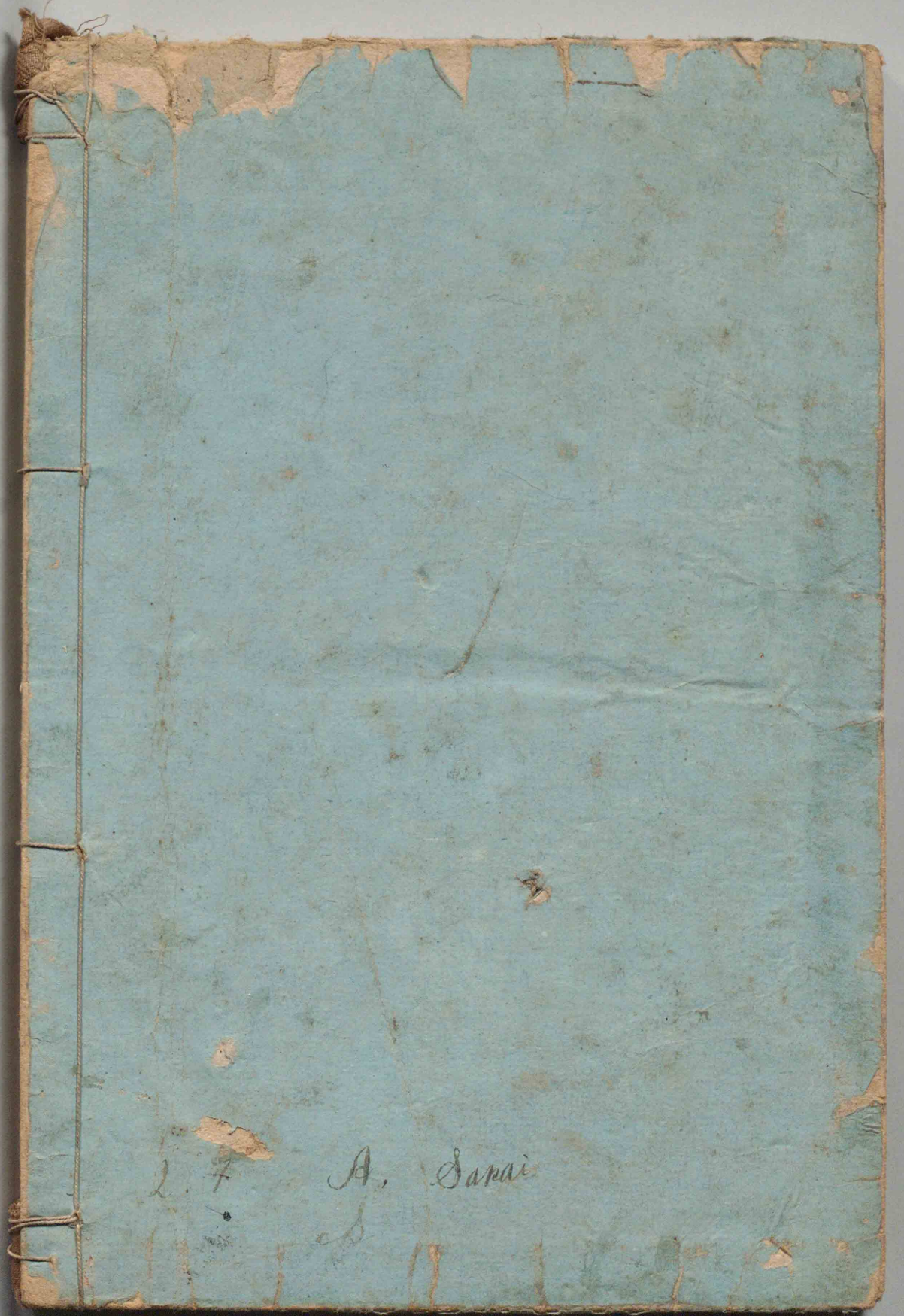
大阪市東區安土町四丁目 積善館本店  
電話東一三三〇  
福岡市博多中島町 積善館第一支店  
廣島市鹽屋町 積善館第二支店  
東京市日本橋區通油町 水野慶次郎

福岡縣福岡市濱ノ町二十五番地

大阪市東區安土町四丁目三十八番屋敷

大阪市南區大寶寺町中之町三百三十八番邸





L. 7 A. Sarai  
ed